白澤の助手さん

海日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白澤の助手さん

【Ｎコード】
Ｎ３４３０Ｓ

【作者名】
海日

【あらすじ】
ヴァンパイアが去った後の妖界。計都を治して貰うため、婆稚は白澤の助手になる決意をした。

カルテＮｏ．１　計都-１（前書き）

第一部で死んだと思われていた計都が、第二部の最終話で元気そうにしてたので、それまでにはきっとこういう話があったんだよ！というお話。９巻半ばから始まります。

「羅喉」の「喉」の字は本当は目へんなんですが、変換されないので口へんの字を使っています。

あと、白澤病院の間取り？形？が分かってないのでちょっと変なところあるかもです。

カルテＮｏ．１　計都-１

「待てよ羅喉！　羅喉――ッ！！」

婆稚の必死の訴えも虚しく、はぐれ鬼羅喉はヴァンパイアと共に去った。

追おうとする婆稚を止めたのは、座敷童のカイエだった。

「大切なヤツを護れなかった　悔しいなら……」

カイエは首の傷痕に触れる。

「死んでも生きろ」

「……カイ…エ…」

『大切なヤツ』を護り切れず、重傷を負いながらも生き延びた彼の言葉には重みがある。

そして、その重傷を負わせた原因の一部でもある婆稚は、思わずカイエから目を逸らした。

逸らした視線は、人間たちを捉えたのだった。

†††††††††††††

ヴァンパイアに血を吸われ意識を失った月島秀人、浦上弥生を、悔いるように見つめているクロを白澤が一喝する。

「医者(おまえ)が絶望してどーするよ！？　破門にすっぞバカ弟子！！」

河童は薬に詳しい。なのでカッペイは薬を調合していた。

鎌鼬は、斬りつけた後に血止めの薬を塗っていく。だから鎌鼬に斬られても血は一滴も出ない。

一匹が差し出したその薬を件が手に取り、あと二匹の鎌鼬は協力して包帯の両側にたくさんの小さな足が生えたような妖――手当て妖怪・繃帯(ほうたい)もめん――を使いやすい大きさに切っている。

雪女も一抱えほどの氷を持ってきた。

誰も絶望してなどいないのだ。皆、自分にできることを頑張っている。

それなのに、医者たる自分が絶望してどうするのか。

「はい！」

クロは力強く言った。

「必ず　治します！！」

†††††††††††

それを見て、婆稚はくるりと身を翻した。

「婆稚？」

どこへ行くのかとカイエに尋ねられ、婆稚は振り返って言った。

「人界……クロの学校へ。計都の亡き骸がそのままになってるから」

「……そうか」

振り返った婆稚のその顔は、笑っていたけれど。

どうしようもなく寂しそうに見えて、カイエにはそれしか言えなかった。

†††††††††††††

一人人界を訪れた婆稚は、クロたちの通う私立文篠高校、１－３の教室に足を踏み入れた。

計都やクロ、ヴァンパイアにマタさんまでもが戦ったこの教室は、一部の壁が吹き飛び床がえぐれるなど、激戦の傷痕を生々しく残している。

その中に、放置されたままの計都の遺体があった。

「計都……」

呟いて婆稚は彼女の傍らに屈み込み、それに刺さった三つ又の槍に似た武器の柄を、計都の背中に近いところで折る。

そして、今度は穂先の部分を抜こうと俯せに倒れていた彼女を抱え上げた。

その瞬間、婆稚ははっとして計都の胸に耳を押し当てる。

――トクン……

微かな心音が、確かに聞こえた。

――まだ生きてる……！！

婆稚は大急ぎで計都を抱え立ち上がる。

刺さった穂先は抜かない。抜けば余計に出血が増える。

――早く、妖界へ運ばなければ。

婆稚はだんっと教室の床を蹴り、妖界へと来た道を引き返した。

†††††††††††††

「クロ、白澤！！」

はぐれ鬼ならではのスピードで走って帰って来た婆稚に、皆が注目する。

「あ？」

「婆稚くん？」

振り向いた妖怪の医者たちに、婆稚は必死に言い募った。

「計都、計都はまだ生きてるんだ！！　お願いだ、治して……！！」

婆稚の腕の中に横たわる計都を見て、彼らは顔色を変えた。

「おいクロ、緊急手術だ！！　件、ガキどもを頼むぞ！！　カイエ、キューカン嬢貸せ！」

「はい！」

「分かりました」

「もちろんだべ」

婆稚が計都を地面に寝かせると、クロと白澤はすぐに手術を始める。

少し離れてそれを見守ることしかできない婆稚は、秀人と弥生のそばにいる件に話しかけた。

「あの……そいつら、さ。大丈夫……？」

しゅんとした表情を浮かべる婆稚に、件はふっと微笑んだ。

「大丈夫ですよ。どちらも一命は取り留めましたし、今は安定した状態です。ですから」

件はぽん、と婆稚の肩に手を置く。

「大変なときに、わがままを言ってしまった……なんて、気に病む

必要はありません」

婆稚は目を見開いた。

自分が考えていたことを言い当てられたのだから当然だ。

見ていたカイエがぼそっと言った。

「顔に出てるんだよ。オラでも分かるべ」

†††††††††††

しばらくして手術が終わり、婆稚は噛みつくように白澤に尋ねる。

「計都は！？」

そんな婆稚に、白澤はどうどう、と両手を肩の高さまで上げて言った。

「手術は成功だ。あんな状態で生きてるとは、さすがはぐれ鬼だな。ただし」

いつもどこか余裕のある白澤の表情が、すっと厳しくなる。

「見ての通り保護養液は干上がっちまった。病院は休みにするしかねえ」

先の戦いを思い出す。

ヴァンパイアとの壮絶な戦いの中で、保護養液は一滴残らず干上

がってしまったのだ。

婆稚は思わずうなだれる。

では、計都は。

そんな婆稚に、白澤はにやりと笑って言った。

「そこでだ。あいつ……計都とやらをオレが診てやる代わりに、お前、オレの助手にならねぇか？」

これには、婆稚だけでなくクロも反応した。

「師匠！？　何言ってるんですか、今まで治療に見返りなんて求めなかったじゃないですか！！」

「うるせぇバカ弟子！！　病院が休みのときに診てやるだけでもありがてぇと思え！！」

クロを怒鳴りつけた白澤は、婆稚に向き直って言う。

「助手っつっても、んな難しいわけじゃねえ。薬草採ってきたりとか患者に薬届けたりとか、そんなもんだ。なぁに、あのクロでもできたんだ、お前に出来ねぇ仕事じゃねえよ」

白澤にビッと親指で指されたクロがムッとする。

婆稚はしばらく考えていたが、やがて言った。

「……けど、オレははぐれ鬼だ。そんなの助手にしたら、あんたの

評判が悪くなるんじゃないのか」

白澤は驚いて婆稚の顔を見つめる。

婆稚は本気で言っている風情だ。

白澤はがしがしと頭を掻きながら言った。

「……んなもん気にすんなら、人間のガキなんざ弟子にしねえよ。で、婆稚、オレの助手をやるのかやんねえのか？」

婆稚は、じっと白澤を見上げてはっきりと言った。

「……やる」

その返事を聞いて、白澤はニッと笑った。

†††††††††††

「とにかく、その計都って奴を寝かせるところが要るだろ。そうだな、ここからちょっと西に行ったところに洞窟があるから、そいつそこに置いて来い。まずはそれからだ」

白澤のその言葉に従い、婆稚は白澤病院を出る。

その背を見送る白澤に件が言った。

「白澤殿も素直でない。彼を助手にしたのは、治療の見返りとしてではないでしょう？」

件は着物の袂で口元を隠しているが、ついでに言えばバイザーのようなもので目元も隠れているが、笑っているのが口調で分かる。

「彼ははぐれ鬼で、あの計都という子以外にはこの妖界に頼るものはない。けれど、『白澤の助手』という肩書があれば、無下にされることもない。そんなところでしょうか」

ずばり言い当てられた白澤が渋い顔をする。

「……お前本当に件か？　実は覚なんじゃねえのか？」

「いえいえ、私は生まれてからずっと件ですしこれからもずっと件ですよ。ふふ……」

件の言葉に、クロは感心して師を見遣る。

「師匠、そこまで婆稚くんのことを考えて……！！」

クロにキラキラした視線を向けられ、照れたようにそっぽを向いた白澤は次の瞬間固まった。

「まるで師匠じゃないみたいです！」

白澤はゆらりとクロを振り向いてつかつかと歩み寄り、片手でがしっとその頭を掴んで言う。

「どぉお～ゆぅう意味だそりゃあぁ～？」

「え？　な、何がです？」

自覚のないクロに、白澤の額に青筋が浮いてきた。

次に起こることを、予知能力を使うまでもなく察した件は、片手で額を押さえて小さく溜息をついた。

カルテＮｏ．２　計都-２

白澤が言った通りの場所にあった洞窟の、ちょうどベッドのようになっている岩に計都を横たえた婆稚は、改めてその姿を見つめる。

包帯の巻き付けられた左腕は肘から先を失い、同じく左側の角も半ばから折れていた。三つ又の槍が刺さっていた腹部にも包帯が巻かれてはいるが、そこには血が滲んでいる。

婆稚は彼女の顔にかかった髪を退けて、悄然と呟いた。

「計都、オレさ……羅喉を、止められなかったよ……」

ぽろぽろと、婆稚の目から涙が零れた。

慌ててそれを拭った婆稚は、今度は決意のこもった声で言う。

「そのかわり、計都だけは、――絶対、治してあげるから。」

婆稚は、白澤の病院へと戻るためだんっと洞窟を飛び出した。

†††††††††††††

婆稚が白澤の病院へと戻ってくると、重傷の者を除き皆が病院の後片付けをしていた。

婆稚を見つけた白澤が彼に声をかける。

「いいとこに帰って来た婆稚！！　ちょっとこの岩どけてくれ！」

「！　おう！！」

ぱたぱたと、婆稚は身軽な動きで白澤のもとへと駆けていく。

さっきまで保護養液で満ちていた湖の底で上を見上げていた白澤は、ざざざざ、と急斜面を滑り降りてきた婆稚に言った。

「これだこれ。持ち上げて外に出せるか？」

「もっちろん！」

婆稚は元気よく頷くと、白澤の指差した大岩を軽々と頭の上まで持ち上げ、ぴょんぴょんと変わらない身軽さで湖のほとりまで飛び上がる。

そして、はたと振り向いて白澤に尋ねた。

「なー外のどこー？」

「とりあえず病院の外だー、出入口塞がねー程度にテキトーに置いとけー」

「分かったー」

小柄な婆稚が、自分の体の5倍はあろうかという大岩を持ち上げてたかたかと進んでいくのを見て、周囲の妖怪たちからおぉー、という感嘆の声が上がる。

婆稚は何となくくすぐったい思いで、我知らず足を早めた。

はぐれ鬼――『元人間』、『汚れた魂の化身』などと馬鹿にされてきた婆稚にとって、そんな感情を向けられるのは初めてのことだった。

†††††††††††††

病院の外の空き地に無造作に岩を置いた婆稚が病院に戻ると、クロが何かを抱えて地面をきょろきょろと見回していた。

「クロ、何やってんの？」

婆稚が尋ねると、クロは顔を上げて言った。

「キューカン坊のかけらを探してるんです。さっき、ヴァンパイアさんに砕かれてしまいましたから」

よく見れば、クロが少しだけ複雑そうな表情で笑いながら抱えているのはそのキューカン坊のかけらか。

「そっか。じゃあ、オレも手伝……」

はぐれ鬼の婆稚は、力も強いが視力もいい。役に立てるならと思い言いかけたが、それは最後まで言わせてもらえなかった。

「おーい、婆稚殿ー。こっちの岩も運んでもらえぬかー？」

「婆稚くーん、後でこっちもお願いできるー？」

婆稚はきょとんとして声のしたほうを見た。

烏天狗のジンが、姑獲鳥（うぶめ）のメイが。愛好（アコ）も雪女も、鉄鼠や土蜘蛛も。

皆が、婆稚を頼りにして、仲間として見ていた。

「……」

今までそんな事態に巻き込まれたことがないため、思わず呆けている婆稚の肩をクロが叩く。

「婆稚くん、行ってあげてください。僕の眼鏡は割れちゃいましたけど、結構見えてますから」

にこっと笑って、クロは婆稚の背を押した。

†††††††††††

その後も片付けをしているうち、婆稚はふと何かを探すような仕草をした。

それを見た鉄鼠の若者が問う。

「婆稚くん　どうしたんです？」

「あー、いや。クロの友達の人間たちどこかなーって。岩抱えて横通るのも何だしさ」

ああ、と鉄鼠の若者は頷いて、ついと婆稚の向こう側、少し上のほうを指差した。

「彼らならそこですよ。下に寝かせておくといろいろ危ないから、と義兄(あに)上たちが作っていました」

見れば、土蜘蛛の糸でできているのであろうハンモックが二つ並んで吊されていて、それぞれ秀人と弥生が寝かされていた。

弥生の傍らには百々目鬼(どどめき)のドメが、秀人の傍らには頭だけのパンダのような妖がいる。

「へー……　そっか、蜘蛛の糸ってべたべたしてるのとしてないのがあるんだっけ。便利だなぁ」

婆稚が感心したように言うと、鉄鼠の若者は柔らかく微笑んだ。義兄たちのことを誉められて得意げ、というようにも見える。

鉄鼠と土蜘蛛は長年戦争を続けてきたというが、この若者と土蜘蛛の姫の結婚が決まった後、両者の関係はずいぶんよくなったのだそうだ。

きっと、あまりにも長く続いた戦争ゆえに、どちらも引っ込みがつかなくなっただけだったのだろう。好き好んで戦争などしていたわけではあるまい。

その証拠に、彼らの婚約や和解の話を出したところとんとん拍子に進んだそうだ。

部下に呼ばれ、では、と去っていく鉄鼠の若者の背を見送り、婆稚は近くにあった岩に手をかけた。

それをたまたま見かけた白澤が顔色を変える。

「待て婆稚、それは違う……！！」

しかし、もう遅い。

「……！？」

婆稚がどけた岩の下には、キューカン坊やキューカン嬢に似たモノが、さながら庭石の下のダンゴムシの如く密集していたのである。

思いがけず固まった婆稚は、次の瞬間持ち上げた岩をゆっくり元の場所に戻した。

「……何あれ」

婆稚がぼそっと言うと、白澤がやれやれというふうに頭を掻いた。

「キューカンの巣だよ。キューカン兄（にい）とかキューカン母（かあ）とかキューカン爺（じい）とか。キューカン坊、キューカン嬢の実家だ」

「……へえ……」

キューカン坊たちの謎が、さらに深まった気がした。

†††††††††††

それから、しばらくの時が過ぎ。

クロたちも人界に帰り、その他の妖怪たちもそれぞれ帰路につい

た後。

干上がった保護養液の湖の底で白澤は、ざっ、ざっ、と素手で穴を掘っていた。

やがてその手元から、じわりと液体が滲み出る。

それを見て、白澤はにっと笑った。

「……よし」

滲み出した保護養液は、少しずつ勢いを増し小さな涌き水ほどになる。

湖の岸までよじ登った白澤は、それを見下ろして言った。

「この分だと満杯になるまで結構かかるだろうな…　満杯でなくても、計都が浸かるくらいなら…どのくらいかかりそうだ、件？」

「そうですね……一月くらいではないでしょうか」

話を振られた件が答える。

婆稚はそれを手持ち無沙汰に眺めていた。

一月。

それまで、計都は。

ぼうっとしていた婆稚はだから、白澤にばふっと毛布を投げつけ

られても避けることができなかった。

「……！？」

もがく婆稚に、白澤が言う。

「それ持って今日はもう帰れ。明日からは助手として働いてもらうぞ」

婆稚が毛布から顔を出したときにはもう白澤は彼に背を向けていて、どんな表情をしているのかは分からなかった。

†††††††††††

計都の眠る洞窟に戻ってきた婆稚は、白澤からもらった布団を岩の上に敷き、計都を寝かせて毛布をかける。

「……あれ？」

婆稚は今まで布団や毛布というものに縁がなかったので気がつかなかったのだが、白澤から押し付けられた布団は2組あった。

単に患者のためだと思っていたのだが、自分のことも考えていてくれたらしい。

2組めの布団は喜んで使わせてもらうことにして、婆稚は洞窟から外を見た。

紅く染まった夕焼け空が、とても綺麗だった。

――この世界は。

破壊するには勿体ないくらい、美しい。

だからこそ、その世界で生きたいと――認められたいと願ったはずなのに。

「羅喉……」

何が、道を分けたのか。

考えても考えても、婆稚には何も分からなかった。

カルテＮｏ．２　計都-２（後書き）

鉄鼠の若者って結局名前出てきませんでしたよね…　出番も少なかったし性格イマイチ掴めてないんですがこんなもんでしょうか？

土蜘蛛の姫との結婚式の途中でヴァンパイア戦に出てきたとき、なんか指示してたっぽかったんで部下とか出してみました。

あと、ついノリでキューカンの巣なんて書いちゃいましたが、ほんとキューカン坊たちってナゾの存在ですよね。妖怪？

カルテＮｏ．３　乙姫

翌日。

朝目覚めた婆稚は、真っ先に計都の様子を見た。

目覚める気配はないが、昨日と比べて顔色は良くなったように思う。

「じゃ、な、計都、行ってきます」

聞こえてなどいないだろうが、婆稚は律儀に声をかけてから洞窟を後にした。

†††††††††††††

婆稚が白澤病院に着くと、白澤はまだ寝ていた。

地面で大の字に寝ている白澤の横で、起こそうかどうしようか迷っていると、通りかかった件が声をかけてきた。

「おはようございます婆稚殿。早いですね」

「あ、おはよう……ございます」

挨拶を返してから、婆稚は果たしてそれが正しいのかどうか悩んだ。

だって妖怪って夜行性なんじゃ？

そんな婆稚を通り過ぎ、件は保護養液の湖だったところを覗き込んだ。

「……まあ、少しは溜まりましたかねぇ……」

婆稚も件の横から覗いてみると、湖の底のほうに浅く保護養液が溜まっていた。

「……ぁー……」

呻くような声がしたので二人が振り向くと、白澤がもそもそと起き上がっていた。

「おはようございます白澤殿」

「はよー」

二人の挨拶に唸るように応えた白澤は、くわぁと大きくあくびをした後伸びをする。

婆稚は白澤に言った。

「……あのさっ……包帯、欲しいんだけど……　計都の替えようと思って……」

白澤は寝起きのぼんやりした目つきで言った。

「替えられるもんなら替えてみやがれ。手当て妖怪繃帯もめんナメんな」

そのままのそのそと奥に引っ込んでいく白澤と意味の分かっていない婆稚を見比べて、件は婆稚に言った。

「繃帯もめんは怪我が完治するまで離れません。つまり替えられない、替えなくていいんです」

「えっ、そうなのか！？」

婆稚はびっくりして大きな声を出す。

便利な妖怪もいたものである。

相変わらずのそのそと戻ってきた白澤は、婆稚に一つの薬袋を渡した。

白澤は寝起きが悪いらしい。

「それを竜宮城の乙姫のところまで届けて来い。そろそろ前に渡したのが切れる頃だ」

薬袋には、『妖力増強剤』と書いてあった。

†††††††††††††

件からもらった地図を頼りに竜宮城を目指していた婆稚は、海の前で立ち尽くしていた。

確かに、考えなくても分かることだ。乙姫が竜宮城にいて、竜宮城が海の底にあることくらい。

「……」

婆稚自身にとっては、海の底に潜るくらい造作もないことだ。だが。

この薬袋は耐水性があるのだろうか。

――濡らしたらまずいかな……

婆稚は薬袋をためつすがめつしながら考える。

幸い中に入っているのはビンのようだし、袋が濡れても中身は大丈夫だろう。しかし、噂に聞く乙姫は怒ると怖いという。

――届かないほうが困るよね？

婆稚はそう結論づけて、薬袋を極力濡らさないようにと懐に入れて海に飛び込んだ。

†††††††††††††

こぽこぽと、婆稚の耳元で心地好い水音が弾ける。

随分と深いところまで潜ってきたのだが、まだ竜宮城らしきものは見えない。

その中で婆稚は、荒れた水底に仄かな明かりを見つけた。

明かりに近づいてみると、それは大岩に空いた洞窟の奥から漏れ

てきているようだった。

婆稚はしばらく迷うそぶりを見せたものの、やがて洞窟の中に入っていく。

洞窟の中を泳いでいくと、段々上り坂になってきた。

――何これ。どういうこと？

不思議に思いながらも、婆稚は冒険心に任せて洞窟を進む。

しばらくそうしていると、上に水面らしきものが見えてきた。

ざばっ、と、婆稚は水面から頭を出してきょろきょろと辺りを見回した。

ふと、婆稚が視線を一点に固定する。

それを追うと、荒れ果てて今にも崩れそうな城があった。

周囲には、割れた卵の殻のようなものが散乱している。

婆稚は水から出て城に近づいた。

「……すいませーん……誰かいませんかー……？」

荒れた廃墟に首を突っ込み、婆稚は恐る恐る声をかけてみる。

明かりがついているのだから誰かいるのだろうとは思うが、勝手に入るのはいかがなものか。

「――何者だ」

思いがけず背後から声がして、婆稚は慌てて振り向いた。

そこにいたのは、癖のある黄味の強い金髪に、眼鏡をかけた着物の女性。

とは言っても、腰からは8本の蛇の尾が生えている。

竜宮城の主、乙姫その妖(ひと)だった。

「あ、えっと……　オレは婆稚。白澤の助手です」

「白澤の助手？」

片眉を跳ね上げて繰り返す乙姫に、婆稚は言った。

「て、言っても昨日なったばっかだけど。これが初仕事なんだ……」

言いながら懐を探っていた婆稚は、薬袋を取り出してうっと呻いた。

一応気をつけていたはずなのだが、やっぱり薬袋は濡れていた。

意気消沈する婆稚が両手で持ったままの薬袋を、乙姫はふっと笑って取り上げた。

「多少袋が濡れているくらい構わん。どうせ中身はビンだ。届けてくれてありがとう」

乙姫はそう言うと、右の掌(てのひら)をひらめかせた。

その瞬間、濡れていた婆稚と薬袋の水気が飛ぶ。

「……なんとか、この程度の妖力は戻ったようだ。白澤にも伝えておいてくれ」

乙姫は更に続けた。

「せっかくここまで来たんだ。良ければ茶でも飲んで行かないか？白澤には私から言っておこう」

†††††††††††

荒れた城の外、壁にもたれて座った二人は、乙姫のいれたお茶を飲んだ。

海草でいれたのだというそのお茶は、綺麗な碧色(みどり)をしていた。

「婆稚、と言ったな。はぐれ鬼のお前が何故白澤の助手になろうと思ったのだ？」

乙姫に尋ねられて、婆稚は事情をかいつまんで話した。

†††††††††††

「……なるほどな。仲間を治してもらうため、か……」

乙姫は一人頷いて、自分のいれたお茶を飲んだ。

「お前にとってその計都という鬼は、きっと姉のような存在なのだろうな。」

そう言った乙姫の赤い瞳がどこか寂寥を含んでいることには気づかず、婆稚は繰り返した。

「姉……」

今まで考えたこともなかったが、羅喉を兄と呼ぶなら確かに計都は自分にとって姉のような存在だろう。

「……乙姫さまにも姉ちゃんがいたんだよな。濡れ女、クロの母ちゃん」

乙姫は頷く。

「どんな感じだった？　やっぱ優しいのか？」

身を乗り出してくる婆稚に、乙姫は若干面食らいながらも答えた。

「……確かに、優しい妖（ひと）ではあったよ。けれど、その中にも一本、けして折れない芯があった。……でなければ、人間の子供など育てられなかっただろう」

言いながら、そういえばこの鬼は『家族』というようなものを知らないのか、と乙姫は思い至った。

話を聞く限り『仲間』はいるようだが、それでも血が繋がっているわけではないようだし、そもそも『家族』という概念があるかど

うかも怪しい。

「……姉というのは、大概において後から生まれてきた弟妹を守り導いてくれる存在だ。それが昏睡状態ではさぞかし不安だろう」

守り導いてくれる存在――

婆稚の脳裏に、春日琴子をさらった際先に行けと言って学校に残った計都の背が浮かぶ。

乙姫の言葉に、婆稚は困ったように笑った。

「まあ……ね　でも　頼ってばかりじゃダメでしょ？　たまにはオレが守ってやんないとな」

乙姫は驚いたように婆稚を見た後、柔らかく微笑んだ。

「――そうだな。頑張れよ、婆稚」

「おうっ！」

婆稚は元気よく頷いた。

†††††††††††††

ざんっ、と、再び水の洞窟に潜って帰る婆稚を見送り、乙姫は苦笑まじりに腕を組んだ。

――初仕事が、私のところとはな。

白澤の助手が大妖乙姫に薬を届けた。

その話が妖界中に広がり、婆稚に箔がつくことを狙っているのだろう。

全く抜け目のない男だ。

それに、この薬は。

乙姫はす、とさっき婆稚が飛び込んだ洞穴の水面に手を添える。

すると、水面に白澤の顔が映った。

『お。乙姫じゃねぇか、どうした？』

†††††††††††††

件がいれてくれたお茶を飲もうとして白澤が湯呑みに手を伸ばすと、その中の水面に乙姫が映る。

「お。乙姫じゃねぇか、どうした？」

『なに、少し言うことがあってな。お前の助手、さっき帰ったぞ』

乙姫の言葉に、白澤はそっぽを向いて舌打ちした。

「遅っ。何やってんだバカ助手」

予想通りの白澤の反応に、水面の向こうの乙姫は笑う。

『そう言ってやるな。私が引き止めたんだ　――ところで、この薬』

乙姫は、さっき婆稚が届けてくれた薬袋からビンを出して顔の横で振ってみせた。

『前回もらったとき、次はいらぬと言わなかったか？』

当時の乙姫は、生にさほど執着していなかった。『護国寺黒郎』さえ殺せればそれでよかったのだ。

だから、それまでは命を繋ぐためこの薬を服用するが、その後はいらないと以前言っておいたはずだ。

白澤はニヤッと笑って言った。

「――けど、突っ返さなかったってことは今はいるんだろ？」

水面の向こうの乙姫が一瞬目を瞠る。

『――ああ。次からも頼む』

乙姫のその言葉を最後に、水面から彼女の姿が消えたのを確認して、白澤はぐいっとお茶をあおった。

†††††††††††††

水を介しての通信を切り、乙姫は微かに笑った。

兄を失い、姉を失いかけても前を向き続けるはぐれ鬼がいる。

時々逢いにくると言った甥がいる。

――あやつらの手前、みすみす命を捨てるような真似は、もうできまいよ。

そこまで考えて、乙姫ははっとした。

あのはぐれ鬼が、自分の思考に影響を与えることまでも狙った上で、断ったはずの薬を彼に届けさせたのだとすれば。

つくづく抜け目のない男だと、乙姫は感嘆せざるを得なかった。

カルテＮｏ．４　ジン

「すいまっせ～ん……」

烏天狗・ジンが門番を務める、妖界と人界を隔てる『門』。

その下で、少年の声がした。

門の上にいたジンは、見下ろして驚く。

「婆稚殿！？」

婆稚がいるのは、門の人界側なのである。

「やー、妖界側からだと海に潜んなきゃ来られないじゃん？　今回の薬は濡らすなって言われたからさ」

たはは～、と婆稚は笑って頭を掻く。

門の上から下りてきたジンは、仮面をつけていない。

それを婆稚が指摘すると、彼は言った。

「護国寺黒郎と、約束したからな。母の子として生きると」

ジンの父は烏天狗だったが、母は人間だった。

そのため、彼の翼は左右不揃いで、首は烏ではなく人のそれなのだ。

その人間の顔を隠すために、ジンは以前まで烏の顔を象(かたど)った仮面をつけていた。

そのジンは、婆稚が懐から取り出した薬を見てびくりと身を強張らせた。

「何？　どしたの？」

それに気づいた婆稚が尋ねると、ジンは恐る恐る、という風情で薬を指さして言った。

「……その薬　飲めば人間を妖並みに強くする、あれか」

「……そうだけど……」

仮面をつけないジンの端正な顔からみるみる血の気が引いていく。

「申し訳ない婆稚殿　……その薬はちょっと、受け取れぬ……」

ジンは寒気を催したかのように自らの腕を抱いた。

「先の騒ぎの折　烏天狗の兄者たちにその薬を飲んでいたことを知られてしまってな……」

†††††††††††††

クロに敗北した後、ジンは烏天狗の総領に屋敷まで呼び出された。

門を開けたことに対する叱責を覚悟してその御前に馳せ参じたものの、ジンは内心怖くて仕方なかった。

何せ総領天狗は他の烏天狗たちと比べて体が何倍も大きな上に、普段は穏やかな性格だが怒るととてつもなく恐ろしいのだ。

「……ジンよ」

「は」

膝をついて頭を垂れるジンの前で、その体躯に見合う巨大な椅子に座した総領天狗が言う。

「……おぬし、白澤殿から妙な薬をもらっていたそうだな。何でも、人間を妖並みに強くする薬だとか」

「……、はい」

予想外の言葉に多少驚きはしたものの、事実には違いないのでジンは肯定する。

そうか、知られてしまったか。

頭を下げているのに、総領天狗が鋭い視線を自分に向けているのがよく分かる。

その眼光はまるで、膝をついているジンの背中に刺さるようだ。

それも当然だろう。ジンがしたことは、人界で言うドーピングに等しい。いわばジンは烏天狗たちを裏切ったのだ。

言い訳はすまい、と思ったのだが、ジンはつい口を滑らせた。

「……確かに卑劣な手段ではございましょう　しかし私は半人半妖の身　そうでもしなければ　皆の役には立てぬと思ったのです……！！」

言い終えた瞬間、ジンはぶちっと何かが切れる音を聞いた気がした。

「そんっっなことを言っとるのではないわあぁぁぁ――――！！」

椅子を蹴立てて立ち上がった総領天狗の、屋敷中に轟いた大音声にそこかしこから烏天狗たちが集まってくる。

「総領、総領！　落ち着いて！！」

「ほらほら、ジンだって悪気があったわけじゃないんですから！」

数名の烏天狗たちに宥められつつも総領天狗は再び怒鳴った。

「ええい放せ、この阿呆一度殴らねば気が済まん！」

「総領が殴ったら一発で終わりですよ！」

ジンを擁護するような言葉を口々に並べ立てていた烏天狗たちだったが、総領天狗の次の言葉に全員もれなく固まった。

「この阿呆が飲んだ薬はな、感染力が高く取り憑かれたが最後いずれ体細胞の全てを乗っとられて死ぬようなものだったのだぞ！！」

場の空気が凍りついた。

「何……？」

「死ぬ、だと……？」

総領天狗を抑えていた烏天狗たちがジンを見てそれぞれに呟く。

それを困惑しながら見守るしかないジンは、思わず正座をして背筋を伸ばした。

「成る程総領の気持ち分かりました」

「確かに一発殴りたくもなりましょう」

そろそろと、烏天狗たちがジンに近づいてくる。

「ジン――――ッ！！」

「はいぃっ！！」

総領天狗に怒鳴られ、ジンは跳び上がらんばかりになる。

「二度とこのようなことするでないぞ！！　自らの命を粗末にするような者など我が一族にはいらんのだ！」

「……え？」

一瞬、ジンは言われたことの意味が分からず困惑した。

ややあってから、ジンはばっと平伏する。

「……は……！！　そのお言葉、このジンしかと肝に銘じましてございます……！！」

平伏したジンの肩が小刻みに震えているのを見て、総領天狗はふんとそっぽを向いて鼻を鳴らした。

「おぬしはもう烏天狗の一員なのだ。勝手に死ぬことまかりならぬ」

ジンが床の上で握り締めた拳の前に、円い染みが点々と落ちた。

†††††††††††

「……その後、兄者たちにも散々叱られてな……　自分の命を何だと思っているのだとか、お前が死んだら誰に門番を任せるのかとか……」

ジンは片手で顔を覆って呻くように言った。

「確かに、手合わせのときなど幼い私にも手加減してくれないような怖い方たちなのだが、ここまで怖いと思ったのは初めてだ……」

婆稚は苦笑して言った。

「……まあ、でもよかったじゃん。烏天狗たちに大事にされてるってことだろ」

「それはそうなのだが……今度その薬を飲んだら、薬の副作用

で死ぬ前に総領や兄者たちに殺されそうでな……　せっかく持ってきてくれたところ申し訳ないが、受け取れぬのだ」

申し訳なさげに言うジンに、婆稚はからりと笑った。

「別にいいよ。白澤からも無駄足になるかもって言われてたし　……逆に」

婆稚は声を潜める。

「もしまだ受け取るって言ったら一発殴って絶対薬渡すなって言われてたんだ……」

「！？」

ジンがびくりと肩を震わせた。

「……白澤殿も怖い方だな……」

「うん、命拾いしたね……」

婆稚は次の瞬間けろりとして言う。

「白澤もあれで医者だからね。前は押し切られちゃったとしても、患者を死に追いやるような薬は渡したくないんだよ、きっと」

「婆稚殿……」

ジンはしばし婆稚を見つめた後、ふっと笑った。

「白澤殿に伝えておいてくれ。このジン二度とそのような薬には頼らぬと。私は、父と母の子として強くなる」

「うん。分かった」

にかっと笑って、婆稚は踵を返して駆け出す。

「婆稚殿、どこへー？」

妖界に通じる門はこちらである。

不思議そうなジンに、婆稚は振り返って言った。

「言ったろ、この薬濡らすと怒られるんだー。人界から夢列車で帰るよ！」

空中に浮かぶ岩を元気に渡っていく婆稚の背を見送り、ジンはおもむろに空を仰いだ。

残念ながら、この翼で空を翔けたことはない。それが悔しくて、一時は疎ましく思っていたこともある。

――それでも。

仮面を外して見上げる空は、いつ見たそれより美しかった。

領収書　薬屋

――兄者、かぁ……

白澤病院に戻り、ぼうっとしている婆稚に怒声が飛ぶ。

「コラァ婆稚！　手ェ止まってんぞ！！」

白澤に怒鳴られ、婆稚ははっとして自分の手元を見た。

婆稚は今、薬の材料となる守宮（ヤモリ）の黒焼きをすりこぎとすり鉢ですり潰していたのだった。

「ったくよぉ、細かくすり潰さねえといい薬になんねえんだぞ」

「は～い」

婆稚が間延びした声で応じているところに、件がやってきた。

「白澤殿、お客様ですよ」

「あ？」

――客？　患者じゃなくて？

婆稚は不思議そうに件を見遣るが、白澤は心得た様子で頷いた。

「ああ、薬屋か。通してくれ」

†††††††††††††

「まいど、ど～も～。お久しぶりです～」

先程の婆稚以上に間延びした声でやってきた人物は、ひょろりとした絣（かすり）の着物に、腰に紺地に白で〇の中に薬と染め抜かれた前掛けをして、足元は脚半に草履という格好だった。

婆稚の知る由もないが、それは随分と古風な行商人に似た出で立ちだった。

彼は、地面に座る白澤の前に背負っていた焦げ茶の風呂敷包を置く。

包みを広げると、中身は大きな柳行李（やなぎごうり）だった。

白澤が顎をさすりながら言う。

「そーなー、豚の心臓の灰と、月見草の夜露の香水、あ、あと百足油と……」

「はいはい、ございますとも～」

薬屋の柳行李から、白澤の言った品物が次々と出てくる。

蝉の抜け殻やら蛙の目玉やら、色々と変なものが出てくるのだが、婆稚はそれには目もくれず薬屋の顔を凝視していた。

だって、紺色の布でほっかむりをしたその顔は。

「へのへのもへじ……！？」

どこからどう見ても、白いお面に描かれた落書きなのだ。

婆稚は堪え切れずに白澤の横から身を乗り出して薬屋に尋ねた。

「ねっ、ねえねえ！！　その顔、お面だよね！？」

途端、白澤が吹き出してそっぽを向き、肩を震わせる。

一瞬妙な間があったが、薬屋は笑ってほっかむりをとった。

「いやはや、お恥ずかしい。そうですよ、お面です」

ほっかむりをとった薬屋の顔は、確かにお面だった。

つるつるの頭には毛が3本、お面と同じくらい白い肌に妙に細長い首。

思わずぽかんとする婆稚に、薬屋は言った。

「いやあ、今日は初めて会う方が多いですねえ。さっき行ってきたところでもお面かって聞かれたんですよ～」

「……そりゃ、初めての奴はなぁ……！！　くくっ……」

未だに笑いの収まらない白澤に、すかさず薬屋が別の薬を勧める。

さすが商い人である。

「笑いが止まらないそんなときに、這うムッツリキノコのカサ～。ちぎって食べると笑いが止まりますよ～」

「……いや、さすがにいらん……」

「あら～。残念です～」

しかしそこはそれ、白澤とて無駄遣いはしない主義だ。

……まだ笑いすぎて喋るのが苦しそうだが。

「……では、入り用のものは以上で～？」

「おう。いくらだ？」

「全部で３０００髑髏（ドクロン）です～」

――あんだけ買って３０００髑髏（ドクロン）！？

婆稚はあまりの格安さ加減にびっくりした。

白澤は相当いろんなものを買っていた。それこそ、彼の前に小さな山ができるほど。

しかし、もともとそういう値段らしくどちらも何も言わない。

「それでは、これで失礼いたします。またどうぞご贔屓（ひいき）に～」

薬屋は、ぺこぺこと腰低く去っていった。

†††††††††††††

薬屋が去った後、白澤は買った品物を抱えて奥に引っ込んでいった。

見るからに怪しげなものも交じっていたようだが、婆稚はあえて何も聞かなかった。

――怖いこと言われたら嫌だしな……

そんなことを考えながらごりごりと守宮をすり潰していると、突然彼に何かが投げつけられた。

「！？」

思わずぱしっと片手で受け止めたそれは、平たくて丸い銀の缶だった。

投げつけてきた方を見れば、白澤が腕組みをしてひゅうっと口笛を吹いている。

「さすが。いい反応だ」

「何、これ？」

白澤に尋ねながら缶を開けてみると、黄色いべたべたしたものが入っていた。

「『百足油』。傷薬だ。持っとけ」

言い残して、白澤は再び奥へと引っ込んだ。

†††††††††††††

やがて計都の眠る洞窟へと戻ってきた婆稚は、一人膝を抱えていた。

独りは、寂しい。

けれど、計都を放っておくこともできない。

「羅喉……」

思わず、呼んでも返事など返ってくるはずのない名前が口をつく。

ぎゅ、とさらに身を縮めたとき、婆稚の膝の横に固いものが当たった。

ズボンのポケットに手を入れると、白澤に貰った傷薬が指先に触れる。

ポケットから取り出すと、銀色の缶の表面に自分の顔が映った。

――そっか

独りじゃ、ないんだ。

婆稚は、百足油の缶をぎゅっと握り締めた。

領収書　薬屋（後書き）

今回出てきた薬屋さんは、「妖怪アパートの幽雅な日常」の2巻に出てきた薬屋さんです。

「さっき行ったところでもお面かと言われた」っていうのは、「妖アパ」の夕士のことです。

こんな感じでちょこちょこいろんな作品の妖怪やら何やらを出して行こうと思っています。

リクエストもお待ちしてますm（＿＿）m

…ちなみに、1髑髏（ドクロン）＝1円のつもりで書いてます。

カルテＮｏ．５　《出来損ない》－１

白澤病院の保護養液が、少しずつ溜まってきた。

毎日見ているから気づかなかったが、白澤に言われて最初と比べると結構深くなっていることに気づいた。

それでも、計都を浸けるには足りない。溜まったと言っても、最初と比べればだ。

先は、まだまだ長い。

少しだけ沈んだ様子を見せる婆稚に、白澤が言った。

「婆稚、お前ちょっと天空鬼界（てんくうきかい）に行ってきてくれ」

「天空鬼界？」

天空鬼界と言えば、鬼子母神（きしもじん）の治める鬼の国があるところだ。

「何？　配達？」

同じ《鬼》として一度行ってみたい、と思っていた婆稚はわくわくした様子で言ったが、白澤の歯切れは悪い。

「ん～、ちょっと薬草採ってきて貰おうと思ってな。ただ……」

白澤は、お気に入りの煙管（きせる）を手に取る。

火をつけてくわえると続けた。

「同じ天空鬼界でも、鬼子母神が統治してる鬼の国を外れりゃ結構危険なんだよ。地形的にも」

「にも？」

地形以外に何が危険だというのか。

婆稚が尋ねると、白澤はふうぅっと煙管の煙を吐き出した。

「天空『鬼』界にも、いろんなモンがいてな。中でも……一番厄介なのが、《出来損ない》だ」

《出来損ない》。

それは、人界で陰陽師などが術に失敗したとき、稀に生まれるという。

「自我も持たず、言葉も通じない。ただ破壊衝動に突き動かされてるだけなんだそうだよ。」

白澤の言葉には、どこか憐憫に似た響きがある。

だが、婆稚はそれに気づかず勢い込んで彼に尋ねた。

「何で！？　術は、失敗したら術者に返るんじゃないのか！？」

白澤は再び煙管をくわえる。

「よく知ってんじゃねえか。けどな、そりゃ術を放った『後』に、失敗した場合だ。《出来損ない》は、術を放つ『前』に失敗したモノ……言うなれば、術の失敗作が《出来損ない》だ」

例えるなら、キャッチボールが分かりよいだろうか。

「術」というボールを投げたとき、相手が受け止めればそれは成功である。

しかし、相手がボールを避けてしまったら、相手の後ろの壁に跳ね返ってボールは投げた者に返る。

しかし《出来損ない》の場合、ボールそのものが未完成なのだ。投げてもいないのだから返ってくるわけがない。

「……が、失敗作を人界に放っとくのもいろいろまずい。ってなわけで、陰陽師どもが適当に《出来損ない》を封印したのが天空鬼界、と。ちなみに現在進行形らしいぞ」

白澤は、一際長く煙を吐いた。

「憐れなもんさ。ただ生まれて『存在』してるだけで、生きてると言えるのかすら怪しい。

陰陽師どもも、どうせなら即始末してやりゃいいものを……

何にもねえままただ在り続けるだけなんて、それこそ生き地獄ってもんだろうよ。」

白澤はとんとんと煙管盆に灰を落とした。

「……で、婆稚、お前に採ってきてほしい薬草が生えてんのが

鬼の国と外の境なんだわ。
まあお前がやられるなんてこたまずねえと思うが、何回か《出来損ない》の目撃情報もあるらしいから、気をつけて行って来いよ」

†††††††††††

そういうわけで、今婆稚は天空鬼界にいる。

婆稚が穿いているのは、虎模様の短パンである。

鬼の国ではよそ者――鬼のパンツを穿いていない者――は食ってもいいことになっている、というので、あの後件がくれたものだ。

夢列車で鬼の国に来た後、件の書いてくれた地図を頼りに国の外れまでやってきたが、問題はここからだ。

広い野原に、同じような草が相当生えているのである。

婆稚は鬼の短パンのポケットから、地図とは別の紙を取り出した。

これまた件が描いてくれた薬草の絵だ。

碧鬼草（あおおにくさ）という薬草らしいが、碧いのは花であり、花の時期ではない今、見分けるのは難しい。

「……えー、と？　葉っぱがギザギザで？　茎に毛が生えてて……？」

草原に膝をつき、件の絵を片手に碧鬼草を探す婆稚だったが、なかなか見つからない。

やがて立ち上がって伸びをした婆稚は、頭を掻きながらひとりごちた。

「ん～？　見つかんないなあ……　場所間違ってんのかなあ……　オレの探し方かなあ……」

それでも諦めず探し続けていると、それらしいものが見つかった。

「……おお！？　これか！？　これじゃね！？　……これだ！！」

ギザギザの葉っぱに、毛の生えた茎。まさしくこれが碧鬼草だ。

「……あ、よく見たら密集してんじゃん！　やったね、苦労して見つけた甲斐あった！！」

いそいそと碧鬼草を摘む婆稚だったが、彼は不意に動きを止めた。

はぐれ鬼の聴覚が、遠くから近づいてくる声を捉えたのだった。

†††††††††††††

婆稚はにっと笑うと、片手いっぱいに摘み取った碧鬼草をパーカーの内ポケットに入れる。

《出来損ない》だか何だか知らないが、向かってくるなら迎え撃つまでだ。

最近はおとなしくしていたので、ちょうどいい運動になる。

やがて、その姿が見えてきた。

国の外側から駆けてくる少年の後ろから、大きな暗色の塊が追ってくる。

暗色の塊――子供が描いたゴリラのような、どこかアンバランスな人型の物体。おそらく、これが《出来損ない》だろう。

先程婆稚が聞いたのは、少年の叫びだったのだ。

婆稚はぐっと膝を曲げると、だんっと地面を蹴って跳び上がった。

ちょうど《出来損ない》の目の前に跳び上がった婆稚は、そのまま右の拳を《出来損ない》の顔に叩き込む。

〈グガ……〉

《出来損ない》は怯んだ様子を見せたがそれだけで、すぐに婆稚を払いのけようと顔の前で目茶苦茶に太い腕を振り回した。

「なっ……」

――効いてないのか！？

婆稚は慌てて、《出来損ない》が振り回した腕に飛び乗る。

振り払われると共に自らも跳躍し、宙で一転、二転して草原に着地した。

〈オォオォォ……〉

《出来損ない》が、天に向かって吠えた。

「――――……！！」

婆稚は瞠目する。

自我も何もないと白澤が言っていた《出来損ない》が、泣いているように見えたのだ。

婆稚の後ろで、息を切らしてへばっていた少年が立ち上がった。

彼はぎっと《出来損ない》を睨みつけると、すぐそばに生えていた碧鬼草をむしり取って《出来損ない》に投げつける。

「これでどうだ、《出来損ない》！！」

投げつけられた碧鬼草は何故か《出来損ない》にぴたりと吸い付き、その草が触れたところから《出来損ない》はその形を保てなくなっていく。

〈グォオォォア……〉

気のせい、見間違いなどではない。

婆稚は、確かに見たのだ。

どんどんその形を失っていく《出来損ない》が、泣いている様を。

《出来損ない》の口が動く。

〈ヤッ、ト……〉

婆稚は今度こそ驚愕した。

《出来損ない》は、言葉が通じないのではなかったか。

今、確かに『やっと……』と言った。

聞き間違いなどであるものか。この耳が声を、この目が口の動く様を覚えている。

驚愕のあまり身動きの取れないまま、婆稚はぼろぼろと崩れていく《出来損ない》を見つめていた。

†††††††††††

やがて完全に《出来損ない》が崩れ落ち、風に吹かれて消え去った。

ぜえぜえと、まだ肩で息をしながら少年は婆稚に近づいて声をかけた。

「……俺、翠嵐丸（すいらんまる）ってんだ　お前、は？」

「あ、オレは、婆稚……」

振り向いてよく見ると、翠嵐丸と名乗った少年は婆稚と同じくらいの年のようだった。

吊り上がった切れ長の瞳は露草色で、少しだけ長めの髪はその名にふさわしい翠（みどり）。両側頭部から突き出た角は、とろりとした青磁色。

彼も鬼なのだ。

着流しにした膝丈の着物も青磁色で、裾から見えるのは鬼のパンツか。婆稚の短パンよりも丈の長いそれは、七分丈というところだろう。

その瞳と同じ色の帯は左腰で結ばれ、余分が長く風に揺らされていた。

少年――翠嵐丸は、ニッと笑って婆稚に言った。

「じゃあ、婆稚。お前のおかげで助かった。ありがとう」

「……ああ、いや……」

礼を言われているのに、素直に喜べない。

どうしても、後味の悪さが残っていた。

カルテＮｏ．５　《出来損ない》-１（後書き）

翠嵐丸は、私のオリジナルキャラクターです。

鬼の国に婆稚の友達が欲しくて出しました。

《出来損ない》もオリジナル設定なのですが、ちょっと重い話になりそうです…ｆ＾―＾；

カルテNo．6　《出来損ない》-2

婆稚の浮かない様子に翠嵐丸は少しだけ首を傾げたものの、彼は快活に続けた。

「でさ、お前何やってんの？　俺にできることあるなら手伝うぜ」

「碧鬼草、て薬草を摘んでるんだ。白澤から頼まれて……」

「白澤様に！？　すげーな、あんな妖（ひと）と知り合いなのか……」

†††††††††††††

「……そういえばさ、翠嵐丸、なんであんなことになってたんだ？　国の外から来ただろ」

二人で野原に座り込み、碧鬼草を摘みながら婆稚が尋ねると、翠嵐丸の顔色が変わった。

「……《出来損ない》は、母さんの仇なんだ」

翠嵐丸の露草の瞳に、冥（くら）い光が宿る。

「だから俺、《出来損ない》を倒してやろうと思って。あいつら、碧鬼草でしか倒せねえからこれ持って行ってたんだけど、2体めが出て来やがってさ……」

手持ちの碧鬼草がなくなってしまっていたので、それが生えているここまで引き付けてきたのだという。

婆稚が聞いた叫び声も、《出来損ない》を引き付けるためのものだったのだろう。

「……俺、いつか《出来損ない》を全滅させたいんだ。《出来損ない》を創る陰陽師も」

翠嵐丸の言葉に、婆稚は弾かれたように顔を上げた。

「……それって……」

人間を殺す。

そう言ったのではないのか。

翠嵐丸は肯定した。

「そうだ。何か問題あるか？　あいつらは、俺の母さんだけじゃない。他にもたくさんの鬼たちを殺してるんだぜ？」

翠嵐丸の口調に、迷いはない。さも当然、という風情だ。

だが、その目に宿る光はどこまでも冥い。そして、どこまでもまっすぐだった。

婆稚は、視線を自分の手元に落とす。

ぶちりと碧鬼草を手折って、言った。

「翠嵐丸、お前さ。友達っているよな？」

翠嵐丸は変な顔をした。

「そりゃ、いるけど。それが何だよ？」

「その友達ってさ、翠嵐丸が人を殺すこと望んでんの？」

婆稚がさらりと言った言葉に、翠嵐丸はぐっと詰まった。

「オレだったら、望まない。復讐とかどうでもいいから、そばにいてほしい」

婆稚のその言葉は、羅喉に対する想いだったかもしれない。

「……どうでもいい、だと……！？」

翠嵐丸はばっと立ち上がった。

「お前に何が分かるんだよ！？　さっき会ったばっかのお前に！？」

「お前のことは分かんないよ。でも、置いて行かれる気持ちなら分かる」

婆稚は静かに言った。

「オレの兄貴が、そうだから。兄貴は、自分だけどっか行っちまったんだ。オレたちを置いて」

翠嵐丸は黙って俯き、しばらくその言葉を反芻していたようだった。

やがて彼はどっかと野原に座り込むと、ぶちぶちと碧鬼草をむしった。

「……悪かったよ」

「別にいいよ。オレも変なこと言ったし」

ぼそりとした翠嵐丸の呟きに応じて、婆稚もまた別の碧鬼草に手を伸ばした。

†††††††††††††

しばらくは気まずい沈黙が続いていたが、婆稚の人懐っこさもあるのだろう、やがて二人は打ち解けていった。

「こんなもんか？」

パンパンと手を叩いて汚れを払う翠嵐丸に尋ねられ、婆稚は答えた。

「うん。さすがにこれだけあれば十分でしょ」

両腕いっぱいの碧鬼草を抱えて、婆稚は笑った。

「手伝ってくれてありがとな！　おかげで楽しかったよ」

いや、と返し、翠嵐丸は言った。

「婆稚、お前また来るのか？」

翠嵐丸の質問の意図が分からず、婆稚はきょとんとして答えた。

「ん～……　分かんない。白澤に言われたらまたこれ採りに来るかもしれないけど」

そっか、と頷いて、翠嵐丸は笑う。

「今度来たら、また声かけてみてくれよ。鬼の国で颯(はやて)の翠嵐丸っつったら、同い年くらいの奴らの間じゃ結構有名だからさ。きっとすぐ分かるよ」

婆稚は一瞬翠嵐丸を見つめた後、にかっと笑った。

「おう！！」

翠嵐丸も、ニッと笑った。

その瞳に、冥い光はなかった。

†††††††††††††

白澤病院に帰ってきた婆稚は、摘んできた碧鬼草を白澤の前にばさばさと落とした。

どこか様子のおかしい婆稚に白澤と件は顔を見合わせたが、何も言わずに碧鬼草の状態をチェックする。

「……うん、確かに碧鬼草だな。状態もそこそこだ　お疲れさん」

「……」

婆稚は白澤の労いを聞いているのかいないのか、眉間にしわを寄せたままだ。

白澤はふうっと煙管の煙を吐き出して尋ねた。

「婆稚。何があった」

婆稚は立ったまま、体の横で拳を握り締めた。

「……《出来損ない》に、会った」

「！！」

白澤と件の面差しが強張る。

「……それで！？　怪我はねえのか！？」

身を乗り出して尋ねてくる白澤に首を横に振って見せ、婆稚は続けた。

「《出来損ない》、泣いてた」

白澤の目が反眼になる。

「あのなぁ婆稚、《出来損ない》は……」

「違う！！」

呆れたように言ってくる白澤に、婆稚は叫んだ。

「絶対聞き間違いなんかじゃない。見間違いでもない。あの《出来損ない》は確かに、泣きながら『やっと……』って言ったんだ！！」

白澤は何も言わず、紫煙を燻(くゆ)らせて婆稚を見つめる。

婆稚は、声を絞り出すように言った。

「……『やっと死ねる』、って……！！」

白澤が愕然として、くわえていた煙管(きせる)を落とす。

件もはっと息を呑んだ。

婆稚は涙ながらに続けた。

「何か……　何かないのかよ！？　あいつらを助ける方法はよ！？　せっかく生まれたのに……可哀相すぎるよ！！」

生まれた瞬間から役立たずの烙印を捺され、誰からも必要とされず疎まれて。

挙げ句、泣いて死を求めるなんて。

何のために生まれてきたのか分からないではないか。

ぼろぼろと涙を流す婆稚に、煙管を拾い上げた白澤が静かに言った。

「……言っただろう、婆稚。《出来損ない》は、破壊衝動に突き動かされているんだと。それを抑えられねえ以上、駆除するしかねえんだよ。」

「だけど……！！」

婆稚はぐっと拳を握り締める。

「……昔、羅喉が言ったんだ！！　この世に偶然はないって！！　全ては必然なんだって！！　だから、今は分かんなくても、オレたちはぐれ鬼が生まれたのにも意味があるはずだって！！」

白澤が片眉を跳ね上げた。

あのはぐれ鬼が、そんなことを。

婆稚は言い募る。

「だったら、あいつら《出来損ない》にも何か意味があるはずだろ！！　ただ死ぬためだけに生まれるなんてあるもんか！！」

婆稚は、《出来損ない》に自分を重ねているのだ。

《出来損ない》に意味がないと言われてしまったら、それがそのまま自分に返ってくるのではないかと恐れている。

鼻息も荒く肩を上下させる婆稚に、白澤は静かに告げた。

「婆稚。結論から言おう。少なくとも俺の医術では、《出来損ない

》は救えねえ。管轄が違う、とでも言やあいいのか？」

凍りつく婆稚を尻目に、白澤は碧鬼草を１つつまみ上げた。

「俺にできたことと言やあ、あいつらを死なせてやる方法を見つけることだけだった。

この碧鬼草ってなぁな、人に障られた妖を癒す薬になるのよ。人がかけた術を解く効果もある。」

――だから。

だから、この草でしか《出来損ない》は倒せないのか。

《出来損ない》は、失敗した術の成れの果てだから。

「《出来損ない》は泣いてたっつったな、婆稚。『やっと死ねる』っつったって。そりゃあ、破壊衝動のままに誰かを傷つけるのが辛かったからじゃねえのか」

白澤は畳みかけるように続ける。

「破壊衝動を抑える術はねえ。なら、辛いまま生かすより、死なせてやったほうがマシだろ」

何も言えない婆稚に、白澤はふうっと煙管の煙を吹きつけて言った。

「今日はもういい。帰んな」

婆稚は、小さな拳を握り締めるしかなかった。

カルテＮｏ．６　《出来損ない》－２（後書き）

やっぱり難しいです、《出来損ない》。

翠嵐丸までも重くなってきたので先行き不安すぎるんですが、…がんばります。

『この世に偶然はない　あるのは必然だけ』というフレーズはどこかで使いたかったので、今回出せてよかったです。

ＣＬＡＭＰさんはこのフレーズ好きですよね…　『ＣＣさくら』や『ｘｘｘＨＯＬｉＣ』…

カルテＮｏ．７　《出来損ない》－３（前書き）

今回ちょこっと流血ありです。苦手な方はご注意を。

カルテＮｏ．７　《出来損ない》－３

――翌日。

「……来ねえ」

呟いて、白澤はあぐらに頬杖をつきいらいらと自分の頬を指で叩く。

いつもなら、朝の早い婆稚が寝起きの悪い白澤を叩き起こすのだが、今日は白澤が自分で起きるくらいの時間になっても婆稚は現れなかった。

毎朝毎朝、保護養液の溜まり具合を見に来る婆稚が姿を見せないことに件も心配そうだ。

あまり表情には出ないが、ちらちらと病院の出入口のほうを見ていた。

「～～～～～っ」

白澤はすっと立ち上がると、すたすたと出入口に向けて歩き出した。

「白澤殿？」

件が問うと、彼はぶっきらぼうに答えた。

「……散歩だ」

†††††††††††††††††

白澤が婆稚に教えた洞窟に着くと、そこにいたのは横たわった計都だけだった。

それを認め、白澤は即座に踵を返した。

†††††††††††††††††

あまりに早い白澤の帰還に驚いた様子の件だったが、彼が一人であることに気づき顔色を変える。

それにすら気づかぬ様子で白澤は煙管に火をつけてくわえ、大きく息を吸い込むとふうぅっと煙を吐き出した。

まるでスクリーンのように広がった煙は、そこに婆稚の姿を映し出す。

彼の周囲に映るモノたちを見るに、今婆稚がいるのは。

「……天空鬼界……の、ようですね」

件の言葉に、ばきりという音が重なった。

件が隣を見遣ると、白澤がばきぼきと何かを噛み砕いている。

その足元には、吸い口のない煙管が転がっていた。

「あぁぁぁんのぉぉぉ……！！」

低い声で言いながら、白澤は奥へとずかずか入り込み、やがて出てくる。

その手に携えられているのは、虎模様の帯。

白澤は手早くそれを腰に巻き付けて結ぶと、たっと病院から飛び出す。

件がそれを追って出入口から外を覗くと、馬か驢馬（ろば）に似た白い獣が天高く翔けていくのが見えた。

件は振り返って、白澤が残して行った煙管の残骸を見る。

「……煙管は食べ物じゃないんですけどねえ」

呟いて、件はそれを片付け始めた。

†††††††††††

天空鬼界、鬼の国を駆け抜ける婆稚は、国の内と外の境、碧鬼草（あおおにくさ）の原を目指していた。

――助けられないなんて、納得できない。

脇目もふらず走っていく婆稚を、露草の瞳が捉えた。

「……婆稚？」

細い青磁の角が生えた翠（みどり）の髪が、揺れた。

†††††††††††††††

碧鬼草の原を抜け、婆稚は《出来損ない》を探す。

しかし、人や物というのは探しているときに限って現れなかったりする。

「どうして……」

それは、何に対する問いか。

《出来損ない》が現れないことか。それとも、救えないことに対してか。

それは、呟いた婆稚自身にも分からない。

深い森の真っ只中で婆稚が立ち止まっていると、その背後から闇の塊が盛り上がった。

†††††††††††††††

「馬鹿野郎婆稚ッ！！」

考える前に、体が動いていた。

目の前に現れた《出来損ない》と、その向こうにある婆稚の背を見た瞬間、先の怒号が婆稚を追ってきた翠嵐丸の口を突いた。

同時に彼は駆け出し、《出来損ない》を追い抜いて婆稚のパーカ

ーのフードを掴むとそのまま数歩駆け抜けて彼を引きずり倒す。
さっきまで婆稚がいた場所に、《出来損ない》の巨大な拳が振り下ろされていた。
地面がへこみ、土くれが飛ぶ。
「……！！」
呆然と起き上がる婆稚を翠嵐丸は叱りつけた。
「何やってんだよ！？　ンなトコでンな油断する奴があるか！！」
翠嵐丸は婆稚の腕を掴んで立たせると続けた。
「走るぞ、せめてあの原まで……」
その言葉に、婆稚ははっとして翠嵐丸の手を振り払う。
「嫌だ、オレは……」
「あァ！？　何言って……」
翠嵐丸と押し問答をしているうちに、《出来損ない》が彼らに近づいて拳を振り上げた。
影がさし、２人が気づいたときにはもう遅い。
「くそっ……」

翠嵐丸が悔しげに呻いた、そのとき。

『うらぁ！！』

白い四つ脚の獣が、空から降りてきて《出来損ない》にタックルした。

弾き飛ばされた《出来損ない》は、どうと尻餅をつく。

白い獣は、婆稚と翠嵐丸を守るように彼らの前に降り立つとその姿を変える。

あっと婆稚が息を呑んだ。

「白澤……！？」

背中越しに振り向いた白澤は、無言でギロリと婆稚を睨む。

婆稚はびくりと身を竦ませたが、白澤は視線を滑らせて翠嵐丸を見ると軽く瞠目した。

その頭部から突き出た細く長い青磁の角は、他の鬼と同じような牛のそれとは明らかに違う。

「……“かぜのぶき”、か」

確認するように白澤が問うと、思わぬところで有名妖（ゆうめいじん）に出会った緊張からか、翠嵐丸は恐る恐る、というふうに頷いた。

白澤はそれを見て続ける。

「風を借りたい。いけるか」

一瞬呆けた翠嵐丸の顔に、じわじわと覇気が宿った。

「……はい！！」

２人の会話の意味が分からない婆稚を巻き込み、翠嵐丸を中心に烈風が渦巻く。

「……！？」

すう、と翠嵐丸の体が解(ほど)けて風となった。

翠嵐丸を取り込んだ風の塊はやがて白澤の手元へと移動し、そこで風が凝縮される。

白澤の手に握られる風の具現は、長さ１５０ｃｍはあろうかという大剣。

幅広の刃は淡く翠(みどり)の光沢を放ち、未だ風を纏っている。

やっと起き上がった《出来損ない》に向けて、白澤が大剣を構えて駆け出した。

〈オオォオォ……〉

《出来損ない》は大きく吠えると、それを迎え撃つため無茶苦茶に腕を振り回す。

大剣の起こす風に乗り、軽々とそれを躱していく白澤は、だんだんと高い位置へ上りつつある。

婆稚は、だっと駆け出した。

†††††††††††††

大剣の巻き起こす風に乗って、《出来損ない》の頭上に舞い上がった白澤は、懐から碧(あお)い錠剤を数錠取り出す。

それを、《出来損ない》に投げつけようとした刹那。

《出来損ない》と彼の間に、小柄な影が滑り込んだ。

「っ、婆稚……！？」

白澤は慌てて、錠剤を投げつけようとしていた腕を引く。

緊迫した面持ちで白澤を見つめる婆稚は、白澤の表情が困惑から変化したことに気づいた。

白澤の視線は、婆稚の更に後ろに注がれている。

白澤は片手に持っていた大剣を自分の後方にブン投げ、今度はその手で婆稚の胸倉を掴んだ。

渾身の力で引っ張るも、僅かに間に合わない。

婆稚の背中に、熱さが駆け抜けた。

「……っ……つ……」

《出来損ない》の腕が変形し、刃となって婆稚の背を斬り裂いたのだ。

幸い、白澤が引っ張ったおかげで傷は浅く済んだものの、婆稚の背中からは鮮血が滴っている。

「ったくよぉ……っ」

風を纏う白澤は苦々しげに呟くと、婆稚をも後方に投げ飛ばす。

いつの間にか現れた翠嵐丸がそれを受け止めた。

「翠嵐、丸……？」

婆稚は、半ば呆然と呟く。

彼を難無く受け止めた翠嵐丸は、ぼろぼろと涙を落としていた。

†††††††††††††

白澤は風の渦の中で、婆稚を斬った《出来損ない》を見下ろした。

その表情に、容赦はない。

もはややみゆく風の中で、白澤は碧い錠剤を振り撒いた。

†††††††††††††

白澤が振り撒いた碧い錠剤の触れたところから、《出来損ない》は消えていく。

たっ、と婆稚たちの前に降り立った白澤は、黙ってそれを見つめていた。

カルテＮｏ．８　《出来損ない》－４

やがて完全に《出来損ない》が消え去るのを見届け、白澤は婆稚を振り向いた。

そして静かに言い放つ。

「ズボン　ポケット」

泣きじゃくる翠嵐丸をなだめていた婆稚は、白澤の発した２つの単語に思い当たってズボンのポケットを探る。

今婆稚が穿いているのは、昨日穿いていた鬼の短パンではなくいつものズボンだ。

ポケットを探ると、平たくて丸い銀の缶が出てくる。

それを白澤がむしり取った。

そのまま婆稚の背中側に回って、中に入っている黄色い薬を塗ってくれる。

……が、白澤の発する空気が痛い。

「……ええと……」

白澤に声をかけるのが恐ろしい婆稚は、翠嵐丸に話しかけた。

「翠嵐丸……何？なんで泣いてるの？」

翠嵐丸は、拳で涙を拭いながら言った。

「……俺……　武鬼(ぶき)だからさ……武器として刃を交えた奴の気持ちとか、分かることもあるんだけど……」

武鬼(ぶき)。

それは、武器に変化する鬼。

中には風や水などを操る力を持つ者もおり、他の鬼たちと違い牛の角ではなく細くなめらかな角を持つ。

「……何にもない……何にもないんだよ、婆稚！　あいつら、ほんとに何にもないんだ……！！」

翠嵐丸は続けた。

「今まで色んな奴と試合とか戦ってきたけど、あんな何にもない奴いないよ……殺意も敵意も、闘志や感情すらないんだ……！！」

白澤があ、と声を上げた。

「……あのときか……！！」

《出来損ない》の攻撃を躱していたとき、つい大剣を使って受け流したことがあった。

「知ってたから気をつけてたんだが、つい使っちまった。悪かったな、風だけ借りるつもりだったのに」

白澤に頭を下げられ、翠嵐丸は慌てて首を振った。

「いえ、武鬼（武器）として当然のことですから……」

そう言って翠嵐丸は気丈に涙を拭う。

そんな姿を見て、婆稚は不意にうなだれた。

「……ごめん」

翠嵐丸と白澤は一瞬きょとんとし、彼らが口を開く前に婆稚は続ける。

「……全部、オレがムチャなことしたせいだろ。救えもしないのに……」

翠嵐丸は婆稚の肩に手を伸ばしかけたものの、沈み込む彼にかける言葉が見つからず結局その手を引っ込める。

一方、白澤は婆稚の背中に『百足油』を塗り終え、銀の缶のフタを閉めるとふんと鼻を鳴らした。

「何でもかんでも救えると思うなよ、婆稚。そんなことができるなら世話ねえよ。医療の神たる俺にだって救えねえもんはあるんだ」

白澤は婆稚に『百足油』の缶を返すと続けた。

「勘違いすんなよ、お前がしたことが全部無駄だって言ってるわけじゃねえ。俺は一度お前に《出来損ない》は救えねえ、と言ったな

？」

婆稚は黙って頷く。

「それでもお前は、《出来損ない》を救おうとして走ったな？」

婆稚は再び頷く。

「要はそういうこった。無駄とかそんな話じゃねえんだよ。救えようが救えまいが、走る奴ぁ走る。諦める奴ぁ諦める。それはもうそいつの生き様とでも言うしかねえだろう」

白澤は一旦言葉を切り、じっと婆稚の目を見つめた。

「そういうわけで走るのは勝手だが、他妖（たにん）に心配はかけるな。件もその翠嵐丸って奴も、……まあ、俺だってちょっとくらいは心配したんだ。」

最後は照れたようにそっぽを向いての言葉だったが、婆稚は素直に頷いた。

「……はい」

「よし」

――頷いた、けれど。

「……死なせるしか、ないのかなぁ……」

婆稚の口をついて出た言葉に、白澤は今度は翠嵐丸へと視線を滑

らせた。

「翠嵐丸、お前言ったな。《出来損ない》には何にもねえと。その『何にもない』っていうのを感じて、どうだった？」

「……どうって……」

翠嵐丸はしばらく考えていたが、やがて口を開いた。

「……すごく、苦しかったです。好きなものも楽しいものもなくて、苦しいとすら感じないことが苦しいっていうか……」

語っているうちに段々本当に苦しそうな表情になっていく翠嵐丸を、片手を軽く挙げて遮った白澤は婆稚に向き直る。

「俺はこうも言ったよな、婆稚。『何にもねえまま在り続けるなんて生き地獄だ』、と」

今、白澤の目の奥にあるのは、透明な感情。

少なくとも、婆稚には読み取れない。

「医者は常に考えなきゃなんねえ。患者を生かすか、それとも殺すか」

「殺すって……」

思わず鋭い声を上げる婆稚だが、白澤は動じない。

「安楽死ってのがあるだろう。どうしても治らないならば、いっそ

死んだほうがマシ……そういう場合もあるんだよ」

白澤はすい、と立ち上がって天を仰いだ。

「よぅく覚えておけよ、婆稚。どう頑張っても救えねえモノもいる。死なせてやることが救いである場合もあるのさ」

白澤自身、何度かそんな患者たちと出会ってきた。その度に果てしない無力感を噛み締めたものだ。

ひょっとしたらこの言葉は、傷つきたくないが故の逃げと取られるかもしれない。しかし白澤にとっては、傲慢にならないための戒めなのだ。

できないものはできない。神とて全能ではない。それを忘れてはならない。

――ならば、せめて。

「あれらを、哀れと思うなら。運よくいろんなモンを持ってるお前らは、精一杯楽しんで生きろよ。あれらの分までよ」

精一杯楽しんで生きろよ。

その言葉に、翠嵐丸は自分の心を見透かされたような気がした。

《出来損ない》を倒すためなら、自らを犠牲にすることも厭わなかった自分。

婆稚にすらそれをはっきりとは言っていないのだから、白澤がそ

んなことを知るはずがないのだが、彼の言葉は翠嵐丸の胸に尾を引いて残った。

†††††††††††††

しばらく誰も何も言わずに時が過ぎ、流れる風が彼らの髪を揺らした。

その中で、ふと白澤が言った。

「……そうだ」

婆稚と翠嵐丸が白澤を見る。

「さっきの錠剤な。鬼子母神（きしもじん）の依頼で作ってた、碧鬼草を濃縮した奴なんだが」

ぽん、と白澤は婆稚の頭に手を置く。

「明日こいつに届けさせるから、翠嵐丸、お前鬼の城までの道案内とかしてやってくれや」

「はい！」

元気良く頷いた翠嵐丸だったが、はたと動きを止めた。

その視線は、婆稚の背中に固定されている。

「？　翠嵐丸？」

当の婆稚が尋ねると、翠嵐丸は呆然とした様子で言った。

「……傷が……」

婆稚の背中の傷が、綺麗に消えているのである。

「え、嘘っ！！」

婆稚もびっくりして自分の背中を見ようと奮闘する。

確かに、さほど深い傷だったわけではないが、傷薬を塗った程度ですぐ治るものでもなかった。

というか、傷が深かろうが浅かろうが、傷薬を塗ろうが塗るまいが、この短時間でここまで綺麗に傷が消えるとなるともはや医術ではない気がする。

二人揃って白澤を見れば、知らん顔で口笛など吹いている。

「さて。帰るか！」

白澤のあまりにも爽やかな笑顔に、それ以上の追及は諦めざるを得なかった。

†††††††††††

白澤は虎模様の帯を身につけているが、婆稚は鬼のパンツを穿いていないため、翠嵐丸とは国の境で別れた。

その後、獣の姿になった白澤の背に跨がり病院を目指す中で、婆

稚は白澤に尋ねた。

「そういえばさ。なんでオレが天空鬼界にいるって分かったの？」

『あ？　なもんおめー、昨日煙管の煙を吹きかけただろうが。あれでマーキングしてたんだよ』

そういえばそんなこともあったかと婆稚は思い返す。白澤も同様だったようで、なんだか妙なオーラが滲み出てきた。

それは、限りなく怒気に近い。むしろそのものだ。

『何となく予想はしてたが本当に行くたぁな……！！　せっかく……』

辛い思いをしなくてもいいようにと、最初から無理だと言っておいたのに。

しかし心のどこかで、それでは婆稚は納得しないと分かってもいたのだろう。

それこそ、生き様の問題だ。

「え？　何？」

最後のほうが聞き取れず、婆稚が聞き返すと白澤は言った。

『何でもねえよ！　明日からもっとこき使ってやるっつったんだ！！』

「えぇ～！？」

婆稚は情けない声を上げたが、白澤の表情は柔らかかった。

カルテＮｏ．８　《出来損ない》－４（後書き）

婆稚の傷が消えた件。これは、「地獄堂霊界通信」で、椎名に傷薬を塗ってもらったてつしの傷が消えたところから。

多分おんなじ薬だと思うんです多分。

婆稚の持ってる缶のフタにも呪文字がびっしり書いてあります。婆稚はただの模様だと思ってますが……

カルテＮｏ．９　《出来損ない》－５

翌日、婆稚が夢列車で天空鬼界に着くと、翠嵐丸がその駅で待っていた。

「……婆稚、お前こんなんで天空鬼界来てたのか……」

発車していく夢列車を見送り、翠嵐丸は冷や汗を浮かべながら言った。

初めて見た夢列車のおどろおどろしさに衝撃を受けたようだ。

しかし、そのおどろおどろしさにもう慣れっこの婆稚は平然と言う。

「うん。乗ってみると意外と楽しいよ？」

――そんなわけあるか。

翠嵐丸は心の中で盛大につっこんだ。

だって、窓から見ただけで車内の凄惨な様子が丸分かりなのである。

しかし、はぐれ鬼として並外れた戦闘能力を持つ婆稚にとっては、楽しいアトラクションに違いなかった。

その婆稚は、水色のナップサックを背負っている。

駅を出て、鬼の城へと向かう道すがら、翠嵐丸は婆稚に尋ねた。

「そのナップサックが、昨日白澤様が言ってた錠剤？」

「うん。そうなんだけど……」

答えて、婆稚はナップサックを揺すり上げた。

「なんか妙に重いんだよね。既に中身入った状態で『ほい』って渡されたからあれだけど、あの錠剤ってそんなに重いのかなぁ？」

どれ、と翠嵐丸もそのナップサックを背負ってみる。

と、背負えないほどではないものの、確かに中身が錠剤だとは思えない重さだった。

翠嵐丸にナップサックを返して貰った婆稚は、よっ、と背負ってこきこきと首を鳴らす。

「白澤のことだからなんか変なもん入れてるんじゃないかなぁ……鬼子母神様に怒られたらやだなぁ……」

本気で白澤を疑っている風の婆稚に翠嵐丸は、ははは と若干乾いた笑い声をこぼした。

†††††††††††

さて、彼らはやがて鬼の城へと辿り着き。

入口で屈強な門番2人に呼び止められ、翠嵐丸は内心びくびくし

ているのだが、婆稚は平然としたものだ。

鬼の城の門番は強くて怖い、と幼い頃から教えられてきた地元民と、へーこんなんなんだーと半ば感心している観光客の違いである。

「え～っと、白澤の使いでやって来た婆稚です。こっちは付き添いの翠嵐丸」

「……ども……」

翠嵐丸はぺこりと頭を下げる。

婆稚たちから見て右の門番が、持っていた紙と婆稚、翠嵐丸を見比べて頷いた。

「婆稚、翠嵐丸だな。鬼子母神様、白澤様から聞いている」

彼が左の門番に目配せすると、左の門番は頷いて門扉の横の大きなボタンを殴るように押す。

ごごごごご、と重厚な音と共に、鬼の城の門が開いていった。

†††††††††††††

しかし、残念ながら門番は門の番をしているから門番なのである。

つまり、城を案内してくれたりはしないのだ。

門番が開けてくれた城門をくぐったものの、婆稚と翠嵐丸は途方に暮れていた。

「……翠嵐丸、これってどこに行けばいいの？」

「俺に聞くなよ、俺だって城の中に入ったのは初めてなんだ……」

立ち止まってひそひそと会話していると、奥のほうからぱたぱたと軽い足音が近づいてきた。

2人揃ってそちらを見やれば、そこにいたのはセーラー服姿の少女。

鬼子母神の末娘、愛好（アコ）その鬼（ひと）である。

駆け寄ってきたアコは、婆稚と翠嵐丸の前で立ち止まり言った。

「すいません遅くなっちゃって　夜に来ると思ってたものだから……」

申し訳なさそうにぺこぺこと頭を下げるアコに、翠嵐丸は動転してわたわたと無意味に両手を振る。

「うわぁああっ　大丈夫ですこちらこそ申し訳ありません連絡もせずに――――っ！！」

どうやら白澤は、鬼の城へは「今日」行く、とは伝えたものの、「今日」の「何時（いつ）」、までは伝えていなかったらしい。

天空鬼界とその他の世界を繋ぐ鬼門が開くのはたいがい夜、丑寅の刻なので、アコの勘違いも仕方あるまい。

白澤もテキトーだなぁ、と、婆稚は遠い目をしているが、翠嵐丸はまさかアコが出てくるとは思いもしなかったので大慌てである。

アコは、婆稚にとっては顔見知りの少女というくらいだが、翠嵐丸にとっては天空鬼界に君臨する王族の末子、頭を下げられるなんて考えられないような存在なのだ。

そのアコは、王族の姫君らしからぬ気安さで婆稚たちに接してくる。

婆稚たちは知らぬことだが、彼女はクロたちに対しても同じように接していたから、気安いのは元々の性格なのだろう。

鬼子母神のもとまで彼女が案内してくれるということで、3人で城の中を歩いていく。

その中で、翠嵐丸が呟いた。

「……兵士、多いな……」

すれ違う鬼すれ違う鬼、みな鎧をつけていたり帯剣していたりと武装しているのだ。

元々強い力を持つ鬼が更に武装する、というのは珍しいことなので目についたのだろう。

アコが言った。

「明日は《出来損ない》討伐隊の出発の日ですから。皆さん準備をしているんでしょう」

アコの表情がふっと陰った。

「……討伐隊の指揮は、上から１１番めの兄が取っているんですけど……　兄は、辛そうですね。どうしても……泣いている気がするんだと」

アコの言葉に、婆稚と翠嵐丸がはっとする。

それをどう受け取ったか、アコは自らの拳で軽く自分の頭を小突いててへっと笑った。

「……なんて。すみません外の人に愚痴っちゃって。あ、着きましたよ。ここが王の間です」

†††††††††††††

鬼の国の女王、鬼子母神の御前に参じた婆稚と翠嵐丸は、話に聞いて想像していた以上の彼女の大きさに絶句していた。

が、鬼子母神にしてみれば、初対面の相手に驚かれるのはもういつものことなので、特になんとも思わないようだ。

その鬼子母神は、婆稚たちに穏やかに言った。

「御苦労であったな、婆稚、翠嵐丸。褒めてつかわすぞ」

「いいいいえっ、もったいないお言葉でございますっ！！　ほら婆稚、お前もぼうっとしてんじゃねぇ！！」

あわてふためく翠嵐丸がボサッと鬼子母神を眺めている婆稚の頭を無理矢理下げさせるのを見て、彼女は涼やかに笑った。

「よいよい。楽にしておれ　子どもは子どもらしく元気ならばそれでいい」

５００人もの子どもを持つ鬼子母神はさすが子ども好きらしく、婆稚たちの態度に寛容だ。

これならもし白澤が変なもの入れててもそこまで怒られたりしないかも、などと思いつつ、婆稚は背負っていたナップサックを鬼子母神に差し出した。

「これが白澤から預かった碧鬼草（あおおにくさ）の錠剤です。」

その体に見合う大きな、けれど女性らしい綺麗な手が器用に、婆稚の手からナップサックを受け取る。

その大きさの違いを見て、あーこれは何回か往復しなきゃなんないかもなーと婆稚が思っていると、鬼子母神はそばに控えていた鬼が持っていた器にナップサックの中身をざらざらとあけていく。

その器は普通のおちょこのように見えるが、持っている鬼も鬼子母神並の大きさをしているので、実際はとてつもなく大きいだろう。

「……ん？」

鬼子母神が不思議そうに呟く。

婆稚、翠嵐丸も小首を傾げた。

錠剤を器にあけていくざらざらという音が、長い。

ざらざら。

ざらざら。

「……」

ナップサックの大きさと出てくる錠剤の量が合わない。

やがて器を満杯にして、やっとナップサックは空になった。

鬼子母神は、しばらく満杯になった器と空になったナップサックを見比べていたが、ひとつ頭（かぶり）を振ってナップサックを婆稚に返す。

――どうせ白澤が何か仕掛けたのだろう……。考えても詮ないことだ。

「……依頼した品物、しかと受け取った。白澤にもよろしく頼む」

「あ、はい……」

婆稚もおっかなびっくりナップサックを受け取る。

どういう仕掛けか知らないが、あれだけ入っていればそりゃ重いだろう。

どこかうすら寒い気分で、婆稚と翠嵐丸は鬼子母神の御前を辞し

た。

†††††††††††††

鬼の城を出て、翠嵐丸は婆稚に尋ねた。

「婆稚、今日はこれからなんか用事あるのか？」

「？　いや、今日の仕事はこれだけって言われてるけど……」

きょとんとする婆稚の腕を掴み、翠嵐丸は言う。

「じゃあ、うちの道場寄ってかないか？　お前の話をしたらみんな逢いたがっててさ」

断る理由は、なかった。

助手日誌・P１　天空鬼界-１

鬼の城から道場まで行く途中、翠嵐丸は何度か同い年くらいの子鬼に声をかけられていた。

「あっ、翠嵐丸だ！」

「今から道場行くのー？」

「氷雨（ひさめ）はもう来てたぞ」

『颯の翠嵐丸』は、確かに有名なようだ。

翠嵐丸の通う道場には、だいたい６、７歳から１０代後半くらいまでの子鬼たちが集まっていた。

この道場はちょうど国の中央部に位置し、国中から男女問わずに子鬼が集まってくるのだという。

「うちの道場じゃ東西でチーム分けしててな。俺は東チーム」

ニヤッと笑って翠嵐丸が言った。

「おーい、みんなぁ！　婆稚を連れて来たぞー！！」

戸口で大声を出した翠嵐丸を、道場にいた皆が振り向く。

次いで、わいわいと婆稚たちは彼らに取り囲まれた。

「へーっ、君が婆稚かぁ！」

「白澤様の助手をしてるってほんと！？」

「どこで強くなったんだ？」

彼らの角の形を見る限り、武鬼（ぶき）もそうでない鬼もいるようだ。

道場というから、みんな同じ胴着を着て師範に従っているのかと思ったが、そうでもないらしい。

皆服装もばらばらだし、大人の鬼の姿が全くないあたり師範などという存在はないらしく、年長者が年少の者の面倒を見るだけのようだ。

人界で言うならば、児童館や公民館といったものに近いのではないだろうか。

それが道場と呼ばれ、一応試合らしきものをしていた点は、さすが好戦的な鬼というところか。

道場の友人たちに質問攻めにされている婆稚を、ははっと笑って眺めていた翠嵐丸は、その輪に入らず1人木刀を振っている少女に声をかけた。

「よう、氷雨！　いっちょやろーぜ！！」

振り向いた少女――氷雨は、翠嵐丸より2つ3つ年上だろうか。

着ているのは浅葱（あさぎ）の水干（すいかん）、袖を留める襷（たすき）と帯は虎模様。

大きな瞳は春空を思わせる淡い青色をしており、端麗なその面差しが浮かべる表情は驚くほど静かだ。

純白の髪は顎の高さまでのボブカットで、額の中央から生えた白磁の細い角は先がわずかに欠けていた。

氷雨は静かな表情にかすかに呆れをにじませる。

「……お前はいつも言葉が足りない。私たちは武鬼。武器として試合うか鬼として試合うか」

翠嵐丸はニィッと笑う。

「そりゃもちろん、徒手空拳の1対1で」

「……分かった」

氷雨は持っていた木刀を片付けると、道場の中央、×印が刻まれたところからそれぞれ1mほどの間を空け、一直線上に翠嵐丸と向かい合う。

「聖(ひじり)、審判頼むー！」

「よしゃー！」

翠嵐丸に聖と呼ばれた鬼は、18歳くらいだろうか。この道場の中では最年長の部類に入るだろう。

愛嬌たっぷりの笑顔は人懐っこく、顔立ちは撥剌(はつらつ)としている。明

るい瞳はとても無邪気だ。

ラフなTシャツに虎柄のハーフパンツを穿いている彼の短い黒髪の間からは、牛の角が左右に1本ずつ生えているのが見えた。

婆稚の頭をかいぐり回していた聖は、それをやめてたたっと彼らの元へ駆けていく。

×印を挟んで向かい合う翠嵐丸と氷雨が描く直線に、×印の一歩手前で立ち止まった聖と×印を結ぶ直線が垂直に交わった。

「ほな、行くで。いざ、尋常に……」

指先まで伸ばされた聖の右手が、床と平行に掲げられた後上方に跳ね上がる。

「「「勝負ッ！！！」」」

同時に響いた三者の声に、道場の板張りの床を蹴るダンッという音が重なった。

翠嵐丸と氷雨は磁石が引き合うように、逆に聖は磁石が反発し合うように跳ぶ。

ひとっ跳びで戸口付近にいる婆稚たちの元へと戻ってきた聖は、ふいー、と息をついた。

「危ない危ない。俺も巻き込まれるかと思ったわ」

その言葉通り、2人は壮絶な試合を繰り広げている。

翠嵐丸の拳が唸りを上げ、氷雨の蹴りが空間を薙(な)ぐ。

それだけではない。彼らの周囲では冷気が吹き荒れていた。

「さすが『颯の翠嵐丸』と『氷柱(つらら)の氷雨』でありんすなぁ。武器にならずとも風や冷気が溢れ出ているでありんす」

婆稚の隣で少女が呟いた。

彼女は、婆稚や翠嵐丸より2つほど年下に見える。黄褐色の長い髪をツインテールにしているリボンは虎模様で、髪と同じ色の瞳は憧れに輝いていた。

その両側頭部からは、細くなめらかな青い角が突き出している。

同じく虎柄で膝丈のワンピースは、彼女の活発な印象によく似合っていた。

婆稚が彼女に目を向けると、少女はにっと微笑んだ。

「わっちは葵。西チームの武鬼でありんす」

審判の聖に話しかけるのもどうかと思っていた婆稚は、葵に気になったことを尋ねてみる。

「武鬼って、武器にならないと風とか使えないのか？」

「たいていはそうでありんすよ。そもそも、風やら氷やらを操れる鬼も多いわけではありんせん。――のぅ、兄(あに)ィ？」

葵が振り向いた先にいた少年は、翠嵐丸と氷雨を凝視していた視線をけだるげにこちらへと向けた。

「まあ、そうじゃな。わしらもそうじゃが、何の異能も持たん武鬼や鬼のほうが圧倒的に多い」

少年――葵の双子の兄だという茜の顔は、妹の葵とそっくりだった。

しかし、活発で勝ち気そうな葵と違い、茜の表情は冷静で尊大な印象だ。

そして、彼の髪や瞳の色は妹と同じだが、額にある1本角は赤色だった。

タンクトップに鬼のパンツ、という格好の茜は、ふうとため息をつく。

「『颯の翠嵐丸』、『氷柱の氷雨』。どちらも同じ東チームというのは実に惜しいことじゃな。このような練習試合ならいざ知らず、チーム対抗戦で試合うことはないからの」

「やー、そんな変わらへんやろ。どっちも本気やでー」

「そんなことは分かっとる。背負うものがあったほうがより燃えるじゃろうという話じゃ。それよりぬしはちゃんと審判をせんかい」

振り返って口を挟んだ聖は、茜にぴしゃりと言われて渋々前を向く。

かなんなー、俺のんが茜よか年上のはずやのになー。

そんなことを言いながらも、聖は笑って翠嵐丸と氷雨のほうに目を向ける。

なんだかんだで彼もこの試合の観戦と審判を楽しんでいるようだ。

†††††††††††††

ゴウ、と道場全体を震わすような大音量が婆稚や聖、その他子鬼たちの耳を貫く。

氷雨の放つ冷気が翠嵐丸の起こす風に撒き散らされる中、両者は道場を縦横無尽にあるいは駆け、あるいは跳び回って試合を続けていた。

道場の中央、空中で一度ぶつかり合った青磁と浅葱は、次の瞬間弾き合うように跳ぶ。

お互い反対側の壁に膝をつき、しかしそれも一瞬でしかない。

壁を蹴り再び接近する2人の拳が、交差する。

惜しいことにどちらの拳も目標を捉えることはなかったが、翠嵐丸はすれ違いざま氷雨を背中から蹴り飛ばした。

蹴られた氷雨は体勢を崩した――いや、崩しかけたが、ぎりぎりで床に手をつきとんぼを切って華麗に立ち上がる。

そこに翠嵐丸が繰り出した右の上段蹴りを姿勢を低くして躱した氷雨は、軸となっている翠嵐丸の左足に足払いをかける。

危うく倒れそうになった翠嵐丸だったが、寸前で受け身を取りすぐに跳ね起きた。

しかし、その喉元には既に氷雨の手刀が突きつけられている。

氷雨が口元だけでふっと笑った。

「……今日は私の勝ち」

審判の聖もひょいと片手を挙げて声を上げる。

「勝負あり。氷雨の勝ち～」

「だー！　くっそー！！」

叫んで、諸手（もろて）を挙げた後翠嵐丸は道場の床に仰向けに寝転がった。

そこに、少年たちが集まって声をかける。

「まあまあ。まだ５０勝５１敗だって。」

「翠嵐丸なら１敗くらいすぐ取り返せるじゃん」

「今日の試合も見応えあったぜ」

それとは対照的に、氷雨は１人乱れた衣装を直している。

ただ、遠巻きに少女たちが憧れの視線を寄せているから、孤立しているというわけではないのだろう。

２人の試合を言葉もなく見ていた婆稚は興奮して騒いだ。

「すっげすっげすっげ――！！　オレもオレもオレもっ、闘いたい！！」

婆稚はもううずうずしている。

あれほど白熱した試合を見せられては、おとなしくしていろというほうが無理であろう。

それでなくとも、ここ最近は思い悩むことが多かったのだ。思い切り体を動かしたいと思うのも当然だろう。

聖が言う。

「まあ待ちぃな。せやったらこうしようで。休憩したら翠嵐丸、氷雨、婆稚と茜、葵、俺の３対３でどうや？」

聖は茜、葵の頭の上に手を乗せるとにかっと笑う。

氷雨がぼそっと言った。

「……私は構わない。でも聖が試合に出るなら審判は誰」

そらそうや、と聖が周囲を見渡すと、皆一様に目を逸らした。

「……何やねんな？」

拗ねたように聖が口を尖らせると、あちこちから返事が返る。
「だって、聖たちが闘るのに俺たちが審判できるわけないじゃん」
「巻き込まれる、巻き込まれる。」
「聖だってさっきの翠嵐丸と氷雨の試合、巻き込まれるとこだったんだろ？」
正論だ。
「えぇー。せやかて俺も闘りたいー」
まるで子どものようにごねる聖に、まさしく救いの声がかかった。
「――俺が、やろうか？」

助手日誌・P１　天空鬼界-１（後書き）

今回登場の氷雨、茜・葵は私のオリジナル。

聖は「封殺鬼」の戸倉聖。

ですが、別に天空鬼界の聖は神島に仕えてたりはしません。パラレルと考えて下さい。周りとのバランス考えて服装変えたし年齢変えたし角捏造だし。

私はルルル文庫の封殺鬼しか読んでないからかも知れませんが、あの鬼たちの角の描写があった覚えないんですよねぇ…

バトル描写楽しかったです。はい。まだやります。

《出来損ない》編暗かったんでしばらく遊びます…！！

助手日誌・P2　天空鬼界-2

「――俺が、やろうか？」

戸口から聞こえたその声に、皆が振り向く。

開けっ放しだった扉に片腕を預けて立っている青年は聖より少し年上で、二十歳に届くか届かないかというところだ。

長めの黒髪に縁取られたその顔立ちはどこか氷刃（ひょうじん）を思わせる冷たさと鋭さを持ち合わせており、それでもなおその美しさを損なわせることはない。

いや、むしろそれが彼の美しさを引き立てていると言ってもいいだろう。

氷刃のような雰囲気といい、変化の乏しい表情といい、どこか氷雨と似た印象を抱かせる。

額に1本角の生えたその美青年に向かって、聖が驚いたように言った。

「ユミちゃん！！」

――ユミちゃん！？

驚いたのは婆稚である。

この美青年にその呼び方はあまりにもふさわしくないように思え

たのだ。

しかし、皆慣れているのか呼ばれた本人も含め誰もそれを訂正しない。

聖が続けた。

「ひっさしぶりやなぁ！！　主から休みもろたんか？」

「ああ。ほら、土産だ」

ユミちゃん、と呼ばれた青年が差し出したビニール袋を受け取った子鬼が歓声を上げる。

「きびだんごだ！」

『岡山銘菓』と書かれた包み紙を破って、休憩がてらみんなで床に座りつまみ始める。

「ところで、見ない顔だがそちらは……」

青年が婆稚に目を向けると、翠嵐丸がのしっと婆稚の肩に腕を回した。

「白澤様の助手で婆稚っての。俺の友達ー」

そうかと頷き、青年は婆稚に言った。

「俺は弓生（ゆみお）。普段は人界で人間の使役鬼（しえきき）をしている」

使役鬼、というのは、人間と契約して配下に降(くだ)った鬼のことだ。
ただし、そう呑気なものでもなく、契約に失敗したり仕える価値なしと断じた場合は即座に鬼は人間に牙を剥く。
「ユミちゃんは優秀やさかいなー。契約んときは引っ張り凧やったで」
聖はまるで自分のことのように自慢げに言った。
なるほど弓生だからユミちゃんか、と婆稚が納得していると、むぐむぐときびだんごを頬張りながら聖が続けた。
「でもユミちゃんも無用心やなぁ。そんなカッコで歩きよったらよそ者(もん)と思われて食われてまうで」
確かに、紺のスーツを着ている弓生の服装に虎模様は見当たらない。あったって似合いそうにはないが。
「ならば迎え撃つまでだ。『よそ者は食ってもいい』とは言うが『よそ者は無抵抗で食われてやらなければならない』という法はない」
しれっと言ってのける弓生に、聖は呆れた。
「そら『稲妻の弓生』に敵う奴もそうそうおらへんやろけど……もっと周りに気ぃつこたれや。自分着替えるんめんどいからって……」
†††††††††††††

さて、休憩終わって道場の外である。

道場の前の広場に立った弓生が簡単にルールを説明する。

「全ての異能は使用無制限だ。ただし、武鬼の能力に関しては、ゴム弾や刃引き等相手への配慮を忘れないこと。

試合は、審判の俺が勝負あったと思えば止める。それを無視した攻撃は無効、反則負けだ。

15分経っても勝負がつかなければ引き分けとする。

――異存のない者は、位置について」

「位置って？」

「こっちだ、婆稚」

翠嵐丸に引っ張られ、婆稚は彼と氷雨の間に立つ。

こちらが東チームである。

横一列に並んだ彼らの前には、弓生を挟んで5mほどの間を空けて西チームの3人が並んでいた。

聖の右手に茜、左手に葵という並びである。

両チームの中間から道場側に一歩退き、弓生は右腕を地面と平行に掲げた。

「では、いざ尋常に、」

弓生の右腕が跳ね上がる。

「勝負！！」

響いたのは弓生の声のみ、東チームの3人は弓生の腕が動いた瞬間に地を蹴っている。

彼らが自らの目の前を通過する前に弓生は道場の屋根に跳び上がった。

東チームが地を蹴ると共に、西チームの武鬼・茜と葵はその姿を武器へと変える。

双子の武鬼が変化したのは、意外なことに拳銃であった。

茜の変化した拳銃のグリップには赤で、葵の変化した拳銃のグリップには青で、それぞれ『鬼』という文字がペイントされている。

右手に赤の拳銃を、左手に青の拳銃を掴んだ聖は、間合いを詰めてくる東チームに向け発砲した。

タタタタタタッ！！

文字通り火を噴いたのは、聖の左手の拳銃。

軽い音を立てて連射された弾丸はまさしく炎。

それも、青く燃える燐の炎だ。

聖が銃を横に動かしながら撃ったことと、あまりに疾(はや)い連射のため、都合7つの弾丸が横に並んで見える。

休憩のときに婆稚が翠嵐丸から聞いた、『二丁拳銃の茜・葵』の能力、それは。

射手の『気』を弾丸とする拳銃となること。

射手の『気』を弾丸とするが故に、射手が力尽きない限りその装填弾数に制限はない。

そして射手の『気』を弾丸に変換して放つということは、それそのまま射手の異能が放たれるということに等しい。

つまりあの燐火（りんか）は、聖の異能。

聞いたときは、銃のような近代的な武器にもなれるのか、と婆稚は感心したものだが、今はそれどころではない。

燐火の弾丸が目前に迫る。

しかしその弾丸は、婆稚たちの目の前に現れた分厚い氷が阻んだ。

地面から生えた氷の壁をゴム弾は貫くこと叶わず、砕け散る氷と共に地に落ちる。

「なるほど氷の壁かいな。やるやないか『氷柱の氷雨』！？」

後ろに跳んで距離を取った聖は声高に叫んだが、それに応える者はいない。

何故なら氷雨は武器として翠嵐丸の手の中にあるから。

それは、白い日本刀。

刀身、鍔、柄、全てが白い中で、柄頭に通された細長い飾り布だけが彼女の瞳と同じ薄青の色彩を持つ。

やるやないか、と言われたところで、例え今現在2対1だとしても、刀剣対拳銃ではこちらのほうが圧倒的に不利だという事実は変わらない。

――しかし。

翠嵐丸が、ニヤリと笑う。

氷の壁の役目は、弾丸を防ぐことだけではなかった。

砕けた氷の向こうにいたのは、刀を持った翠嵐丸1人。

――ならば、婆稚は？

「こっこっだよ～ん♪」

明るい声に聖が振り向くと、右肘を引いて十二分に溜めを作った婆稚がいる。

聖はまだ振り向きかけの体をねじった状態、避けられる体勢でもタイミングでもない。

婆稚と聖の体格差もあり、婆稚がまっすぐに伸ばした拳は聖の腹部に当たる。

その瞬間、聖は数mほども吹っ飛んだ。

赤と青、2つの拳銃が宙を舞う。

婆稚にしてはずいぶん手加減したほうだ。まずは小手調べというところだろうか。

聖の手から離れ、銃から鬼へと変化した葵がもう1つの拳銃を掴み取って叫んだ。

「聖！！」

「いったぁ～……」

聖は顔を歪めたが、その顔にはどこか強者と闘える喜びがある。

「他鬼(ひと)の心配してるヒマね――ぞっ！？」

葵の目の前に、刀を振りかぶった翠嵐丸が現れる。

葵は迷いなく赤の拳銃の引き金を引く。

ダンッ、ダンッ、ダンッ！！

先程聖が撃った青の拳銃とは違う重厚な発砲音と共に、異能を持たない葵が放つはただのゴム弾。

しかし、それが急所に当たれば弓生は勝負あったと断ずるだろう。

ゴム弾が翠嵐丸に当たる寸前、彼の姿が解けて風となる。

翠嵐丸がいたところをゴム弾が通過した後そこに降り立ったのは、白髪の少女。

その手には翠嵐丸の変化した大剣が携えられている。

氷雨が薙いだ大剣を躱(かわ)した葵のツインテールが跳ね上がり、次いで青い炎に煽られ再び翻(ひるがえ)った。

轟々と燃える青い炎の中で聖は立ち上がる。

「久しぶりやで、こんなんは……　茜、葵、行くでぇ！！」

「応っ！！」

葵は瞬時に赤の拳銃を聖へと放り、自身も銃へ変化する。

同時に、氷雨と翠嵐丸も武器と使い手という立場を交換した。

聖が赤の拳銃で撃つのと、その弾道の先にいる婆稚の目の前に氷の壁が生えるのはほぼ同時。

しかし、今度の弾は先程と違い氷の壁を貫いて進む。

「うわたっ！！」

婆稚の素晴らしい反射神経と、氷壁により弾が減速していたことが幸いして、なんとか彼はその燐火をまとう弾丸を躱した。

「葵は連射タイプやからパワーがない　逆に茜は連射には向かんけどパワーあんねん」

ニッと笑って聖が言った。

婆稚も挑戦的に笑ってみせた。

助手日誌・P2　天空鬼界-2（後書き）

今回登場の弓生も聖と同じく『封殺鬼』のキャラです。志島弓生。年齢いじってます。

使役鬼、という設定になりましたが、誰に仕えてるのかは知りません（え）

や、ただ虎模様似合わなさそう→やっぱ弓生はスーツだろ→でも天空鬼界…→仕事帰り…！！　というだけですはい。

あと前回書き忘れてたんですが、聖の関西弁があやしいのは公式設定です。あの人公式設定が「あやしい関西弁を喋る青年」なんです。

だから関西弁おかしくても大目に見て下さい…ね……？

バトル書くのは楽しいんですが、長々読んでる人はどうなんだろうっていうのがありまして…

とりあえず次話で試合は終わらせるつもりですはい。

次話を待って下さると嬉しいです

助手日誌・P3　天空鬼界-3

「さあさあさあっ、『燐火(りんか)の聖』まだまだ行くで――っ！！」

言いながら、聖は両手の拳銃をぶっ放す。

タタタタタッ！

ダン、ダン、ダンッ！

2種類の発砲音が重なる。

氷の壁が通用しないなら自分で避けるしかなく、婆稚は後方へ跳んで全ての弾丸を躱した。

標的を捉え損ねたゴム弾が婆稚の足元で爆ぜる。

婆稚に気を取られていた聖の左右両方から、翠嵐丸と氷雨それぞれが回し蹴りを放つ。

「うらあっ！！」

「はっ！！」

しかしそれも聖が掲げた両の拳銃の銃身によって阻まれる。

振り払われた2人は1度地面に着地すると、そこから地を蹴ってそれぞれ婆稚の隣に並んだ。

「あーもう、キリねぇな。婆稚、お前俺と氷雨と両方同時に使えるか？」

「ええっ、オレ使ったことないよ剣とか」

「……持っとくだけでいい。私の氷柱（つらら）を翠嵐丸の風で飛ばす」

なるほど飛び道具には飛び道具ということか。

納得の表情を浮かべた婆稚を見て、２人の武鬼はその姿を変える。

大剣と日本刀をその手に携えた婆稚の周囲で冷気が渦巻き、パキパキと音を立てて無数の氷柱が形成されていく。

尖った先端が聖に狙いを定めたところで、烈風が吹き荒れた。

大剣の起こす風に乗って、全ての氷柱が聖へと殺到する。

聖は慌てることなく両手の拳銃の引き金を引いた。

だが、全て撃ち砕いたはずの氷柱がいくつか聖の体をかすめて傷を創る。

「……なるほど」

頬に一筋傷を負いながら聖は物騒に微笑んだ。

氷柱を飛ばす烈風が、撃った弾の軌道を歪めていたのだ。

撃った弾の大半は確かに氷柱を撃ち砕いたが、全てが的に当たっ

たわけではなかった。

しかし、勝負を決めるまでには至らない。どれもかすり傷だ。

自分の体を見下ろしそれを確認した聖が顔を上げると、そこには大剣も日本刀も打ち捨てて彼に突進してくる婆稚の姿があった。

先程彼の拳を受けて数mも吹っ飛んだ聖は、こらやばいなと思うと同時に後方へと飛びすさった。

ドゴォッ……

ちょうど聖のいた辺りの地面が、婆稚の拳を中心に直径数mほどの円形にへこむ。

ざざ、と地を滑った聖はそれを呆気に取られて眺めた。

「なんちゅうやっちゃ……」

ふと気づけば聖の左右からは翠嵐丸と氷雨、正面からは婆稚が迫っている。

聖は両手の拳銃を構えて引き金を引いた。

――が。

その指に手応えはなく、銃口から青炎が噴き出すこともない。

――弾切れか！！

なんだかんだで実はもう結構な時間こうして闘(や)りあっているのだ。弾切れも仕方のないことだった。

――っちゅうことは、１５分もうすぐ経つな。

「でぇいっ、頼むで！」

弾のない銃など文鎮である。

ましてや今の聖は自分の『気』を撃ち出すこともままならないくらい疲労が溜まっているのだ。

同時に3人など相手取れるはずがない。

聖が左右に投げつけた拳銃は瞬時にその姿を変え、それぞれ黄褐色の髪の子鬼となる。

「りゃあっ！」

「ふっ！」

「はあっ！」

「やっ！」

「たあっ！」

「せいっ！」

六者六様の気合が響き、翠嵐丸と茜が、氷雨と葵が、婆稚と聖が

ぶつかり合う。

翠嵐丸の正拳突きを受け流した茜は、その懐に滑り込み彼のみぞおちに肘を打ち込む。

「ぐ……！！」

痛みに顔を歪める翠嵐丸が一瞬動きを止めたのをいいことに、茜は攻撃を続ける。

茜の右回し蹴りが翠嵐丸の左脇腹に当たり、その勢いのまま放たれた左の後ろ回し蹴りが翠嵐丸を襲う。

しかし、このままやられ続ける『颯の翠嵐丸』ではない。

翠嵐丸は茜の後ろ回し蹴りが当たる直前にその足首を掴み、ぶんっと力任せに投げ飛ばした。

翠嵐丸よりも年下、小柄で軽い茜はやすやすと投げ飛ばされて宙を舞う。

空中で何度か回転し体勢を整えて着地した茜の背に、とんっと何かが当たった。

視界の端でちらつく黄褐色の細く長い糸を見て、茜は振り向かずに呟く。

「……葵か」

「あい。兄(あに)ィ、わっちを」

「おう」

短いやり取りの後、葵の姿が解けて青く『鬼』の字の入った拳銃となる。

それを手に取った茜がその銃口を翠嵐丸に向けるのと、葵を追ってきた氷雨が茜とその向こうにいる翠嵐丸の間に氷壁を創るのはほぼ同時。

茜が青の拳銃の引き金に指をかけた。

†††††††††††

気合と共に突き出された婆稚の拳をその手首を掴んで止めた聖は、ニッと笑うとそのまま婆稚を地面に叩きつけた。

「いっ……て」

呻いたもののすぐに跳ね起きた婆稚は、その目の前に聖の拳が迫っていることに気づき慌てて身を捻る。

突きを躱された聖はかすかに体勢を崩し、それを婆稚は見逃さない。

すかさず足払いをかけ転倒させようと試(こころ)みるが、聖とてそう甘くはない。

前転の要領で地面を転がり、起き上がって婆稚に向き直る。

その身長差を埋めるため地を蹴って跳び上がった婆稚の拳と、それを迎え撃つ聖の拳が交錯した。

†††††††††††

青の拳銃の引き金に指がかかり氷の壁が生え、２人の鬼の拳がすれ違ったそのとき。

バリバリバリ！
ガッシャァァァンッ！！

何故か道場の屋根に取り付けてある避雷針に、突如として雷が落ちた。

それに重なるように、

タ――ンッ……

という、軽いが長い音が響く。

その音を聞いて、茜がらしくもなく顔色を変えた。

「いかんっ、しゃがめ翠嵐丸！！」

とっさにしゃがみかけた翠嵐丸の頭を、風の塊がかすめていった。

翠（みどり）の髪が数本宙に舞い、１拍置いて氷の壁が砕け散る。

しゃがんだ翠嵐丸がおそるおそる後ろを振り返ると、そこでは十数発のゴム弾がうっすらと白煙をあげていた。

発砲音が繋がって聞こえるほどのスピードで連射されたその弾丸が、氷の壁を貫通したのだ。

事実、砕ける前に目にした氷雨の氷壁には、ゴム弾が通るほどの小さな穴が空いていた。

子鬼の姿に戻った葵と共に茜が翠嵐丸に駆け寄ってくる。

「すまん翠嵐丸、つい引き金を引いてしもうた！」

「……いや、しゃがめっつってくれて助かった……」

ゴム弾がかすめた頭をさすりながら、翠嵐丸は呆然と呟いた。

†††††††††††††

「うわあああああっ！？」

「どわあああああっ！！」

突然の雷鳴に体がすくみ、バランスを崩した婆稚は、同じく一瞬動きを止めた聖の肩あたりに頭から突っ込んだ。

仰向けに倒れた聖の上から婆稚が慌てて飛びのくと、聖は上体を起こして道場の屋根の上にいる弓生を見上げると叫んだ。

「ゆゆゆゆゆユミちゃんっ！！　何やっとんねん！？」

弓生はその両手にパチパチと爆ぜる小さな稲妻をまとわせてあっ

さり答えた。

「15分経った。試合終了だ」

「せやからなんでそれで雷やねん！！」

どうやら弓生は、雷を操るという異能を持っているらしい。さっきの雷は彼が落としたもののようだ。

天上にある天空鬼界で一体どのようにして雷を起こしているのか定かではないが、雨さえ降らない天空鬼界の道場に避雷針がある理由は薄々分かった。

†††††††††††

道場前の広場に、弓生の玲瓏たる美声が響く。

「翠嵐丸、氷雨、婆稚対聖、茜、葵。この勝負、時間切れにより引き分けとする！」

わあっ、と、道場の前で一部始終を見ていた子鬼たちから歓声が上がる。

審判の制止を無視して攻撃した、というので、銃を撃った西チームが反則負けになるところだったのだが、東チームの

「茜は撃った後ちゃんと『しゃがめ』つったし！！」

「……そもそも雷落としただけで『やめ』ともなんとも言ってない」

「いきなりあんなでかい雷落ちてきたらそりゃ引き金引いちゃうよ」

という抗議により引き分けとなった。

「やー、楽しかったなー。久しぶりにやり応えあったわー」

満足そうに聖が言った。

「またちょいちょい来ぃや。いつでも歓迎したる」

†††††††††††

「ただーいまー」

「おかえりなさい」

「おー」

婆稚が白澤病院に戻ってくると、件と白澤はシュークリームを食べていた。

件がどうぞ、と手渡してきたシュークリームは、大人の握り拳ほどの大きさで、薄い紙袋に収まっている。

紙袋からシュークリームを半分ほど出し、紙袋に包まれている部分を持って勢いよくかぶりつくと、シュー皮の中から甘いカスタードクリームがたっぷりと口の中に広がった。

天空鬼界で壮絶な試合を繰り広げ、疲れて帰ってきた婆稚の体に、その甘さが心地よく染み渡る。

頬にクリームをつけた白澤が言った。

「遅かったな、婆稚。何やってたんだ？」

「ん～……　翠嵐丸たちと一緒に道場で遊んでたー」

もごもごとシュークリームを頬張りながら婆稚が言ったことに、白澤が片眉を上げる。

「『たち』？　なんだ、翠嵐丸の他にも友達できたのか。よかったな」

ぴた、と一瞬婆稚の動きが止まる。

――友達。

『白澤様の助手で婆稚っての。俺の友達ー』

翠嵐丸の言葉が耳に蘇る。

婆稚は柔らかく――幸せそうに、笑って頷いた。

「……うん。」

そーかそーかと、やけに嬉しそうに白澤が笑う。件も穏やかに微笑んだ。

その後、天空鬼界での出来事を楽しそうに、事細かに語る婆稚と、それを笑って聞いている白澤と件の姿を見た者があれば、おそらくこう言っただろう。

彼らの姿はまるで、仲のよい家族のようだった、と。

助手日誌・P３　天空鬼界-３（後書き）

途中で出てきた『弾のない銃など文鎮である。』というのは、『キノの旅』のパロディです。

『弾のないパースエイダーなんて文鎮ですよ』という台詞があったのでやってみました。

……えー、でもですね、そういうの読んでる割にはガンアクションは適当なんですね。私あまり銃器詳しくなくて…

茜・葵の銃の特性も、実在の銃がどうこうというよりは2人の性格が出るような設定にしてます。実際拳銃に連射タイプとかパワータイプとかあるんですかね？（↑聞くな

銃の威力とかもよく分からないのですが、まあ…納得行かない方は氷雨の氷が特別なんだと思って下…さ……

まあそもそも鬼が変化した拳銃に現実味を求めることが間違ってるんではないかと！思うわけです！（↑開き直りよった！Σ（゜Д゜）

趣味全開の長ったらしいバトル、読んでくださりありがとうございました！m（＿＿）m

カルテＮｏ．１０　斑

そして時が過ぎ、白澤病院の保護養液もなんとか計都が浸かるくらいになったころ。

今日中に計都を移動させる、ということで、白澤が彼女の眠る洞窟へと往診に来ていた。

傷が癒えれば離れるという繃帯（ほうたい）もめんは未だ離れる様子を見せない。

白澤は計都の額に手を当てて熱を計ったり、手首をとって脈を診たりしている。

それを不安げに見ている婆稚は、診断が下るのをただ待っていた。

ヴァンパイアにやられたせいなのか、傷が治るのが随分と遅い気がする。

そもそもこんな大怪我をしたことが今までにないから、基準が分からない、というのもあるだろう。

やがて白澤が言った。

「まあ、移動に支障はねえな。行くぞ」

婆稚が計都を抱え上げ、白澤がその前を行く。

保護養液の湖のふちから2人とも身軽に飛び降り、ばしゃばしゃ

と水音が響いた。

婆稚が白澤の指示に従い、そっと湖の底に計都を横たえると、白澤が静かに口を開いた。

「……体の傷が治っても、目覚めないこともある。――覚悟は、しておけ。」

婆稚はむっとして白澤に何か言い返そうとしたが、その表情を見て口をつぐむ。

いつも強気な白澤がそんなことを言うくらい、計都の傷は深いのだ。

この言葉は、不器用な白澤なりの精一杯の気遣いにほかならない。

もしも本当に計都が目覚めなかったとき、少しでも婆稚の傷が浅くなるように。

婆稚は、視線を計都に戻してゆっくり頷いた。

「……うん。」

けれど。

計都は必ず目覚めると、信じることは罪でないはずだ。

†††††††††††††

2人して湖のふちによじ登り、ぱんぱんと服の汚れを払っている

婆稚に白澤が尋ねた。
「それでお前、これからどうすんだ。計都と一緒にこっち来るか」
「あ――……」
婆稚は、独りきりの洞窟を思い浮かべる。
――あれはちょっと、耐えられそうにない。
「……うん。オレもこっち来る」
「そうか、じゃあ後で布団とかこっちに……」
などと話していると、件が何かを抱えてやってきた。
「白澤殿、病院の前にこんなものが落ちていたんですが」
「あ？」
件が差し出したのは、えらくぶさいくな猫だった。
三毛だから猫だろうと思うが、体型的には子豚に近いかも知れない。あと、なんか酒臭い。
「何だこれ……　患者か？　そもそも妖か？」
白澤がむにむにとその生き物（？）をつついていると、それはわずかに身動きして唸った。

その声を聞いた途端、白澤が身を強張らせる。

「え、その声……　お前、斑（まだら）……！？」

こく、とそれが頷くと、白澤は盛大に吹き出した。

「ぎゃ――っはっはっはっ！！　こりゃまた笑える姿になったもんだなあおい！？」

「白澤、なんで笑えんの！？　むしろ怖いよこれ、不気味だよっ！！」

笑う白澤とは逆に、若干青ざめた顔で婆稚は斑と呼ばれたモノを指差して叫ぶ。

すると、それが動いた。

ごすごすっ！！

「いでぇっ！！」

「だっ！！」

件の腕の中から飛び出し、白澤と婆稚の額に頭突きをかましたブサネコは、したっと病院の床に着地する。

「ええい、高貴な私を指して笑えるだの不気味だのと、いい加減に……」

くらっ。

たしたしと前足で床を叩きながら説教をしようとしていたブサネコが、仰向けに倒れた。

ブサネコに頭突きされた額をさすりながら、白澤が彼を見下ろして行った。

「……そういや、なんでその高貴な斑サマがこんなヘンピな病院に来てんだよ。調子悪いのか」

「……見たら分かるだろう、二日酔いだ」

「……ああ、そういや酒臭かったか」

頷いて、白澤はまだ額を押さえてうずくまっている婆稚に言った。

「婆稚、奥から二日酔いの薬取って来てくれ。『きゃべじー』て書いたラベル貼ってある茶色の小ビンに緑のフタしてあっから」

「うあ〜〜い……」

額をさすりさすり、よたよたと奥へ引っ込んでいく婆稚を見送る白澤は、視線を感じて振り向いた。

いつの間にか起き上がったブサネコが、じと目で白澤を見ていた。

「……噂には聞いていたが　あの助手　はぐれ鬼……『元人間』、だな」

白澤は着物の懐から煙管（きせる）を取り出すと、ヘッと笑った。

「それがどうしたよ？」

「ふん。お前も物好きだなというだけさ。人の子を弟子にした後は元人間を助手とするか」

「人間の用心棒なんかやってる高貴な斑サマに言われたくないね。人間に招き猫に封印されたっつーからどんなもんかと思やぁ、そんな笑えるナリだしな」

白澤は煙管をくわえて一服すると、鋭くブサネコを睨んだ。

「うちの助手に手ェ出してみろ。ただじゃおかねぇぞ」

「そんなことはしないさ。あんなまずそうな『汚れた魂』を喰らわずとも、私にはもっとうまそうなとっておきがある」

澄ました顔でさりげなく助手を侮辱され、白澤の妖気が膨れ上がる。

挑発するかのように、ブサネコもその妖気を高めた。

バチバチと、双方の間で膨れ上がった妖気が火花を散らす。

その外側で2人を見ている件には、金髪の少年とぶさいくな猫ではなく、馬かろばに似た白い三つ目の獣と、額と目の下に赤い紋のある犬に似た白い大きな獣が見えていた。

そこに、何も知らない婆稚が戻ってくる。

「白澤、これ？」

さっと妖気を霧散させた白澤は、振り向いて婆稚の持つ小ビンを受け取った。

「おう、これこれ。ほれ、斑」

ひょいと投げられた小ビンを器用に頭で受け止め、そのまま頭の上に乗せた状態でブサネコは婆稚を見据えた。

「？　？」

品定めするようなその視線を、婆稚は戸惑いながらも受け止める。

やがて婆稚から視線を外し、ブサネコは言った。

「……白澤よ、先の発言は取り消そう。これはこれでうまそうだ」

「へ？」

うまそう、などと言われたことに婆稚はつい小首を傾げるが、ブサネコは取り合わず踵を返してとてとてと病院を出ていく。

頭の上に？マークを量産したまま、なす術もなく立ち尽くす婆稚の隣で、白澤はニッと不敵に笑った。

――誰にも、うちの助手を『汚れた魂』などとは言わせない。

はぐれ鬼たちは、皆純粋だ。

だからこそ、必死に計都や《出来損ない》を助けようと奔走し、危険を承知で自ら囮となり敵地に残る。

あの羅喉でさえ、根幹を糾(ただ)せばただ強さを求めただけなのだ。

――おそらくは、計都と婆稚のために。

こんなふうに、彼らは純粋に他者を思いやれる心を持っている。

ブサネコは――斑は、それを見抜いたのかも知れない。

でなければ、誇り高いあの妖が軽々と前言を翻したりはしないだろう。

しかし、純粋故の危うさをも彼らは持ち合わせている。

純粋故に、裏切られた傷はより大きく深くなる。

純粋に他者を思いやるが故に、自分のことには頓着しない。

羅喉はきっと、その危うさに呑まれただけなのだ。

もしも羅喉が根っからの悪妖(あくにん)だと言うのなら、婆稚が懐くものか。

ククッと笑って、白澤は煙管の灰を落とした。

――純粋故に堕ちたモノを救えるのは、純粋故に這い上がったモノだけだろうよ。

「さーあ、婆稚、引っ越しだ引っ越しだ！」

カルテＮｏ．１０　斑（後書き）

今回出てきたブサネコ――斑は、「夏目友人帳」シリーズから。

本当は斑――ニャンコ先生ではなくもっと脇役の、ヒノエとかを出そうと思ってたんですが、つい。

『きゃべじー』はキャベジンです。一応念のため表記。

次話は羅喉メインの外伝的な話にしようと思っています。

…できるだけ早くあげられるようにがんばります…

羅喉外伝：蝶の行き先（前書き）

今回の主人公は羅喉。彼が、計都・婆稚と袂を分かつ前のお話。

羅喉外伝：蝶の行き先

とある夜遅く、賑やかな繁華街の中を常人には視えない存在が歩いていた。

はぐれ鬼が一人、羅喉である。

周囲の人間にはその姿が見えないのだから、避けて歩く人間などいないはずだが、道の真ん中を堂々と歩く羅喉にぶつかる者はなかった。

夜の闇に輝くネオンや街灯の群れを、美しいなと思いながら羅喉は足を進める。

――さあ。

今日は何を持って帰ってやろうか。

いつも羅喉たちのいる海の守り神、竜王の厳重な監視の目をすり抜けて海を抜け出し、人界にまで来られるのは羅喉だけだ。

だから、人界に来たときには何かしら土産を持って帰ることにしている。

もちろん、計都と婆稚にだ。

いつかこの美しい世界をこの手中に収めれば、3人揃ってここを訪れることもできるだろう。

そんなことを夢見ながら、羅喉はとある雑貨屋の店先で足を止める。

そこに置いてあるワゴンに積まれたカチューシャやヘアゴムの中から、羅喉は大きな蝶の飾りがついたヘアピンを手に取った。

ちなみに、羅喉が手に取った時点でそれは常人には見えないモノとなる。

計都への土産はこれにしようか、と、彼がその蝶のヘアピンを服のポケットに入れたそのとき。

はぐれ鬼の並外れた聴覚が、微かな苦鳴と罵倒の声を捉えた。

†††††††††††††

助けてやろう、などという気はあまりなく、どちらかというと興味本位でその声を辿ってみる。

すると、薄暗い路地裏へと行き着いた。

そこでは、何人もの男たちが1人の少年を取り囲んでいた。

路地の壁にもたれて座り込み、俯(うつむ)く少年の逃げ道を奪うように立つ男たちは、口々に何か言いながら少年を寄ってたかって痛めつける。

「ンだよ、持ってんのこれだけかァ？」

「もっと小遣い持ってんだろ、出せよホラ」

ドカ、と脇腹を蹴りつけられ、少年はげほげほと咳き込む。
彼は手の甲で口元を拭い、一瞬視線を上げようとしたが、少年は結局黙って俯いた。
その様子に、羅喉は苛立ちを覚えてつかつかと彼らに歩み寄る。
――そして、少年の周囲に群がる男たちを一瞬で吹き飛ばした。
それは、まさに一瞬。
たった一瞬で、羅喉は男たちを殴り倒し蹴り飛ばしたのだ。
姿は見えずとも、殴られた、あるいは蹴られた感触や衝撃は伝わる。
吹っ飛ばされた男たちも、それを目の前で見た少年も、目を白黒させていた。
無論羅喉は手加減している。でなければ男たちは死んでいるところだ。
衝撃から立ち直った男たちの1人が、少年に詰め寄って怒鳴った。
「……てめぇ、今なんかしやがったのか！？」
「え、い、いや、僕は……」
「俺だよ」

羅喉はわざと妖気を強め、常人にも自分の姿が見えるように調節してやる。

逆立った金色の髪に吊り上がった両目、魚のひれに似た耳。極めつけはその額から生えたいびつな1本角だろう。

一見して人間ではないと分かるその風貌に、男たちは絶叫した。

「う、うわあぁあ――！？」

ばたばたと逃げ去っていく男たちを無視して、羅喉は少年を振り向く。

びくりと身を竦ませた少年は、すぐ後ろが壁なのも忘れて必死に後退ろうとしていた。

「う……あ　ああ……」

その様子に、羅喉はチッと舌打ちをして妖気を抑え、姿を消した。

†††††††††††

別に、少年に礼でも言われたかったわけじゃない。

実際、羅喉が最初に感じた苛立ちは男たちと少年、両方に向けられていた。

平気で汚いことをする男たちにも、それに無抵抗な少年にも。

――この世界が、美しいなどと。

よく見れば、似たようなことが繁華街のあちこちで起こっていた。

さすがに全てを蹴散らす気は起きず、羅喉は苛々と両手をポケットに入れてあてもなく足を動かす。

――そんな中、ふと通りかかった電気屋の前。

店先に展示された何台ものテレビの画面には、どこかの戦場の様子が映し出されていた。

『――の今の状況がこちらです、たくさんの人々が戦火に怯えて――……』

ぎり、と羅喉は奥歯を強く噛み締めた。

――この世界は。

美しくなんか、ない。

パキ、と、羅喉のポケットの中で音がする。

ポケットの中に入れていた手を出してみると、拳の中でヘアピンの蝶が砕けていた。

つい握り潰してしまったらしい。

くそっ、と毒づいて、羅喉はそれを地面に投げ捨てた。

†††††††††††††

そこから、どうやって海まで戻ってきたのかは覚えていない。

気がつくと自分の腰のあたりに婆稚が飛びついてきていた。

「羅喉、おかえり――っ！！　人界はどうだった！？　お土産は！？」

「……あ、ああ、悪い、今日は土産はなしだ。いいのがなかった」

なーんだ、と、落胆の色を見せる婆稚の頭に手を置き、羅喉は言った。

「その代わり、いいものを見た。見せてやるよ」

そして、羅喉は手の中に球体を形作る。

それに映し出された光り輝くネオンの群れに、わあっと婆稚が歓声を上げる。

それを聞いて、計都も近づいてきた。

――それでいい。

この2人は、知らなくていい。

計都と婆稚が人間に絶望する前に、俺がこの世界を破壊してやる。

計都と婆稚、そして羅喉の間に。

ぴしりと、小さな亀裂が走った。

†††††††††††††

賑やかな繁華街、その片隅で。

落ちているヘアピンについた大きな蝶の飾りが、行き交う人々に踏み潰されて粉々になっていた。

カルテＮｏ．１１　二口女・豆助

「……」

人界、都心の洒落たマンションの一角で。

婆稚は、困惑した表情で件に書いて貰った地図を片手に目の前の扉を見つめていた。

ズオオオオ、とでも表現したくなるような、不必要なほどの異彩を放っているこの部屋。

件の地図を見る限り、場所は合っている、ハズなのだが。

――ホントにこんなとこにいんの？

もう一度目の前の扉と地図を見比べた後、婆稚は覚悟を決めてその部屋の扉を開けた。

†††††††††††††

「おめぇ……　何の用だべ」

ごちゃごちゃとおもちゃの散らばる部屋の奥で片膝を立てて座っていた、淡い色の髪をした高校生――カイエは、かすかに眉を寄せた。

「人界はクロの管轄のはずだろ。なんでおめぇが」

「うん、そうなんだけど……　なんか、後学のために様子見て来いって白澤が」

婆稚が視線を滑らせた先には、少しだけ赤い顔で眠る二口女と豆助の姿があった。

はた、とカイエが婆稚の肩を見て言う。

「……何だべ、それ」

「ん？」

婆稚の肩には、青いキューカン嬢のようなモノが乗っていた。

ただし、キューカン嬢が羽のようなひれを持っているのに対し、婆稚の肩に乗っているほうにはポニーテールのような突起がついている。

「……ああ、これ？　キューカン姉（ねえ）だって。記録用にって白澤が貸してくれたんだ」

「ふーん……」

そのキューカン姉とキューカン嬢は、仲良さそうにくっついたり離れたりを繰り返していた。

「……」

視線を彷徨（さまよ）わせて黙っている婆稚に、ふうと溜め息をついてカイエが言った。

「マリ絵が天上に行って、こいつらの世話はオラが引き継いだ。
クロが言ってた、ヴァンパイアの毒にやられた血を入れ換える応急処置は終わって、今は、体ん中に残ってる毒がこいつら自身の体力でちょっとずつ解毒されるのを待ってるとこだ」

「……そっか」

どうしても居心地が悪くて、婆稚は落ち着かない。

済んだことだとしても、自分たちが彼に酷いことをしたのは事実だから。

元々この部屋には、カイエの想い人であるマリ絵の魂が羅喉によって捕らえられていた。

――『あの座敷童子は、我々には逆らえない』――

そうとしか知らなかった婆稚は、来る前に白澤からそれを聞いて仰天した。

魂――つまり“幽霊”として捕らえられていたということは、肉体という器を持たないということ。

それはつまり、剥き出しの魂をこの世に縫いつけられ千の針で貫かれるような苦しみを常に味わわされていたということを意味する。

――知らなかったでは、済まされないだろう。

「――ごめん」

突然婆稚が口にした謝罪に、カイエはそっぽを向いて言った。

「――謝罪ならいらねぇ。マリ絵がもう貰ってる」

†††††††††††††

『ふうん。あんたが羅喉の言ってた“座敷童子の枷”、ね』

マリ絵の目の前に現れた少女は、結界の向こうでそう言って片手の指を唇に当て、可愛らしく笑った。

結界の檻の中で険しい顔をしているマリ絵とは、随分と対照的だ。

顎の高さで揃えたまっすぐな黒髪、フリルのたくさんついた衣装。一般的にはゴスロリ、と呼ばれるのだろうか。

警戒するマリ絵をよそに、少女は無造作にマリ絵を捕らえる檻に手を伸ばした。

『あっ待って、その檻は……』

慌ててマリ絵は少女を止めようとしたが、マリ絵の予想に反し結界の檻は少女を弾かない。

『……えっ！？』

『残念でした。この檻はアタシに危害は加えない。だってこの結界張った奴の仲間だったもんアタシ』

ニッと少女は笑った。

――ま、結構賭けだったけどね……。この結界がアタシにどう作用するかなんて知らなかったもの

檻を創った者の仲間と聞き、マリ絵は身構えた。

『……何をしに来たの？　私を今度はどうする気？』

少女を睨み、強気に振る舞ってはいるが、マリ絵の声は震えていた。

――カイエ、助けて……！！

心の中でカイエを呼びながら、マリ絵は膝の上でぎゅっと手を握り締めた。

それを見て、少女はふんと鼻を鳴らした。

『別にあんたに用はないわ。言ったでしょ、仲間“だった”って。アタシはコレを創った奴に嫌がらせしに来ただけ。』

少女は檻を掴むと、すっと目を閉じた。

ゆら、と少女の髪が風もないのに浮き上がる。

しばらくして、ふぅっとそれが収まると、マリ絵には結界の質がわずかに変わったのが感じられた。

――え……これって

ぱっと周囲を見回すマリ絵に、少女は檻から手を離して告げる。
『あの座敷童子が来たら勝手に結界が切れるようにしといたから。
……まあ、その分ちょっと強度は落ちたから気をつけなさいよね。
それじゃ』

バイバイ、と身を翻して片手を振る少女に、結界の中からマリ絵は声をかけた。
『ま……待って！　あの、ありがとう！！』

ムッとして少女は振り向いた。
『カン違いしないでよね。アタシはアイツに嫌がらせしたいだけ——あんたを、あんたたちを助けたいわけじゃない』

……だけど、と少女は俯(うつむ)いて呟いた。
『……ごめん、とは言っとく。あんたとあの座敷童子がお互い“好き”だったんなら——アタシたちがやったことは、赦せないだろうけど』

——ごめん。

もう一度言って、少女は今度こそ立ち去ろうとする。

マリ絵は慌てて再び呼び止めた。
『待って待って！！　あの、あなたの名前は！？』

今度は振り返らないまま、少女は背中越しに答えた。

『――計都。』

少女の黒髪の狭間から、両側頭部に生えた鬼の角が見えた。

†††††††††††††

「……行く前に、マリ絵が言ってた。だから、もういいんだ」

カイエは静かに言った。

今度こそ、マリ絵の魂は天上に行った。

今度こそ、ちゃんと見届けた。

カイエはそっと首の傷痕に触れる。

この首を自ら掻き切ることは、もうないだろう。

大妖濡れ女の血を受けたとはいえ、クロは人間だ。いつかはカイエを置いて逝ってしまうだろう。

――それでも。

カイエはもう、独りではない。

看病をしているうちに、二口女や豆助とも仲良くなった。時折見舞いに来る雪女や他の妖たちとも。

ならば、いつかクロがいなくなっても、もう――

カイエが黙り込んでしまったので、婆稚は手持ち無沙汰にキューカン嬢とキューカン姉を見る。

キューカン嬢と一緒に二口女、豆助の周囲を飛び回りながら、キューカン姉は何やらカシャカシャと音を立てていた。

『キューカン姉が帰るっつったら帰って来い。それまでは向こうにいろ』

白澤にそう言われているため、帰ることもできない婆稚は、気まずいまま視線を泳がせる。

それを見て、カイエは婆稚に気怠げに尋ねた。

「おめぇ、将棋できるか？」

「分かんない」

「じゃあ、碁」

「やったことない」

「チェス」

「何それ？」

「……オセロ」

「？？？」

ことごとくできないという婆稚に、カイエはか――っと呆れ返った。

「おっめぇよくそんなんで今まで生きてこれたな！？　人生ほとんど損してっべ！？」

「ええ！？」

将棋盤や碁石、チェスの駒など存在しない海の牢獄で育った婆稚は、チェスやオセロなど聞くのも初めてであるが、遊び好きの子供妖怪・座敷童子にしてみればこのセリフは本気である。

「よし分かったオラが教えてやんべ　１番ルールが簡単なのはオセロだべな」

その辺に放置されていたオセロセットを引き寄せて、カイエは解説する。

「石は白と黒、自分の色の石で相手の色を挟んだらこうやって返して……」

†††††††††††

一通りルールを説明された後、じゃあやってみようということでゲームが始まった。

（……あ　ここまっすぐ４つ取れる）

婆稚はとんっと黒の石をマスの中に打ち、かちゃかちゃと４つの石を返していく。

しかしカイエは、４つも自分の石が返されたというのににやけ顔だ。

「かかったな婆稚　全部返してもらうべ！！」

さっき婆稚が置いた黒石の隣の空きスペースに、カイエは白い石を打った。

「……ああっ！？」

婆稚が悲鳴じみた声を上げる。

先程婆稚が返した石を含め、６つの黒石がひっくり返った。

婆稚が自分の石を置いた列の最後尾には、白い石があったのだ。

１列丸々白に塗り替えられ、婆稚は思わず撃沈した。

「……うわ～、見てなかったあぁ……」

「クック、もっと全体を見なきゃ勝てねえべこのゲーム？」

笑いながら、カイエはちょいっとオセロのボードを婆稚のほうに押しやる。

次の手を打てという合図だ。

「うううう〜〜〜……　じゃあ、ここだっ！！」

†††††††††††††

しばらくの後、婆稚とカイエはそれぞれの表情でボードを覗き込んでいた。

「……まあ、数えなくても分かっけど……　数えてみるべ？」

ニヤニヤしながらカイエは黒の石の数を数えていく。

「……１９、２０、２１。逆算して白が４３。オラの圧勝だべ」

「だ――！！　悔しーっ」

ゴロゴロと床を転がる婆稚に、カイエは言った。

「いやいや、このオラ相手に初心者が３分の１も取れりゃあ上等だべ？　クロなんかいつも１０も取れねえし」

オセロセットを片付け、カイエは次のおもちゃを探す。

「ん〜、次は何するべ……」

その間に、キューカン姉がふよふよと婆稚に寄ってきて彼の頬をつついた。

「ん？　何？　……帰るの？」

少しだけ名残惜しげに婆稚が言うと、キューカン姉は頷くように空中を上下した。

しょーがないなあ、と呟き、婆稚は立ち上がる。

「ゴメンカイエ、もう帰れってさ」

「ん？　ああ、そうか。じゃあ……」

カイエは婆稚に何かを投げて寄越した。

自分に当たる前につかみ取り、見てみるとそれは木片だった。

五角形のそれは、真ん中に何か字が書いてある。

「……王？」

「将棋の駒だ、王将。次来たときは将棋教えてやっから、忘れずに持って来いよ」

婆稚の顔がぱっと輝く。

「うん！！」

その笑顔につられて、カイエもふっと微笑んだ。

カルテＮｏ．１１　二口女・豆助（後書き）

『クロは人間～』のくだりを書いているときに思ったんですが、カイエってクロの牛鬼の呪いのこと知ってましたっけ？

時間帯的には、第一部終了から数ヶ月くらいなので、まだ第二部入ってないと思うんですが……←作者しっかりしろ

どちらにしろ、私は第二部クライマックスの牛鬼：クロｖｓ濡れ女：琴子、それに次ぐ桐生一族の呪い火の一件で、クロと琴子は妖怪の力を失ってしまったんじゃないかと思ってます。個人の見解ですけどね（汗

なので、やっぱり彼ら2人は人間として生きて、月島くんや弥生ちゃんと同じくらいの時期に人間として死んでいくと思うんです。

そして、カイエ始め彼らに関わった妖怪たちは、人間たちとの思い出を大切に抱えながら長い永い時を生きていくのでしょう。

クロたちのような面白い人間がいればちょっかいを出したり友人になったり、
出会いの果てには別れが必ずあると知っても、それでも「別れの悲しみ」より「共にいる喜び」のほうが大きいと知っているから。

「妖怪のお医者さん」のキャラクターに限らず、そんな妖怪たちが私は大好きです。

カルテＮｏ．１２　九尾兄弟-１

婆稚が人界から帰ると、キューカン姉(ねえ)がピューッと白澤の元へ飛んで行った。

「おーよしよし。婆稚もキューカン姉もお疲れ～」

言いながら白澤がキューカン姉を撫でると、キューカン姉はべろべろと口（？）から何かを吐き出す。

「わっわっ、何それ？　何それ？」

好奇心旺盛な婆稚がそれを覗き込むと、そこには眠る二口女と豆助の絵があった。

「うわすごい、めちゃくちゃ上手いじゃん　どうなってんの！？」

「人界で言う『シャシン』ってやつだ。まあちっとばかし撮る仕組みは違うがな」

べろべろと数十枚程度、様々な角度や距離、構図で撮られたものを吐き出すと、キューカン姉はふよふよと病院の中のとある岩に近寄っていく。

いつだったか婆稚が知らずに持ち上げてしまった『キューカンの巣』だ。

キューカン姉はむにむにとその下に潜り込んでいった。

それを見送り、件がいれてきてくれたお茶を白澤と3人で飲んでいると、病院に新たな患者がやってきた。

「……お願いします。弟を、治して下さい。」

そう言ったのは、17歳くらいかと思われる銀髪の青年。

膝を破いたジーンズに派手めのシャツ、流行りのスニーカーと、一見どこぞの繁華街にでもいそうな格好だ。

だが、さりげないアクセサリーなどそのファッションの随所にセンスの良さが見え隠れしている。

吊り気味の瞳は透き通った翠色(みどり)で、意志の強そうな光を宿していた。

彼は、その腕に同じく銀髪、13歳程度の少年を横抱きにしている。

眠っているように見える彼が弟なのだろうな、と婆稚が観察していると、白澤は不機嫌そうに顔をしかめた。

「……またお前か。何度も言ってるだろう、俺はそいつを治す気はない」

「納得できないと何度も言っています。おれが納得できる理由を聞かせて下さい」

軽薄そうな見た目によらずそれなりに礼儀は弁えているようだが、いかんせん口調には苛立ちが隠しきれていない。

青年は続けた。

「病んだ妖怪を治すのが妖怪の医者でしょう。何故弟は駄目なんです」

白澤も負けじと青年を睨み、言い返した。

「そいつを治すべきは俺じゃねえ。そして、治すべきはそいつだけじゃねえ。何度も言ってんだろうが」

ぎり、と青年は奥歯を噛み締めた。

「――それが納得できないと言っている……！！」

婆稚には、病院の出入口から彼の隣にいる白澤の元まで、白銀の風が駆け抜けたように見えた。

抱えていた少年を出入口に置き、青年は白澤に襲いかかったのだ。

「白澤！！」

婆稚が叫ぶが、白銀の青年にのしかかられ喉元を掴まれた白澤は顔色一つ変えない。件も同様だ。

爪が鋭く伸びて尖り、犬歯も巨大化した青年はぐっと白澤の喉を掴む腕に力を込める。

「弟を、治せ。でなければ殺す」

ゆら、と青年の腰から生えた9本の尾が揺れる。その頭からは三角の耳も飛び出した。

先程よりもなお吊り上がった青年の翠瞳は凶暴な光を湛えている。

立ち昇る妖気にわずかながら邪気が混じったことに気づき、婆稚は反射的に青年を白澤の上から突き飛ばし彼を守るように立った。

『がっ……』

突き飛ばされた半獣の青年は、ごろごろと何度か地面を転がって起き上がった。そして、吠える。

――そう、“吠える”。

整っていた青年の鼻面が突き出し、銀色の体毛が彼の全身を包む。

そこにいたのは、白銀の毛並みを怒りで逆立たせた九尾の妖狐。

鋭い牙を覗かせるその顎が、言葉を紡ぐ。

『どけ、子鬼！　おれは白澤に用がある！！』

「悪いけど、どけない。オレも、白澤を殺させるわけにはいかないんだ」

白澤に死なれては、計都が助からない。

睨み合う中、荒れていた妖狐の呼吸が鎮まり逆立っていた毛並みも収まった。

翠の目を閉じ、ふ――っと長く息を吐いて妖狐は再び青年の姿へと立ち戻る。

「――失礼しました。乱暴と非礼は詫びます。ですが、どうしても弟を治して欲しいんです」

膝をつき、頭を下げる青年に、件の手を借りて起き上がった白澤は掴まれていた喉に手を当て、けほっと一度咳払いをしてから言った。

「……相変わらず、弟のこととなると見境がつかなくなるな、お前。――そんなんじゃ治せるもんも治せねえぞ」

最後の言葉に、青年は弾かれたように頭を上げる。

「それは、どういう……」

「さあな。とにかく、何度も言うが俺はお前らを治す気はない。帰れ」

突き放すような白澤の言葉に、青年は悔しそうに唇を噛んでうつむく。

しかし、先程の非礼と暴力が脳裏をよぎって強く出ることができない。

やがて青年は立ち上がると、白澤に背を向け出入口のほうへと向かう。

弟を抱え上げた彼は、立ち去る前に振り返って言った。

「……また来ます。弟を治してもらえるまで」

今度こそ立ち去っていくその背中を、白澤はどこか苦しげに眺めていた。

†††††††††††††

しばらくして、はあ、と溜息をついた白澤が煙管（きせる）をくわえようとすると、件がそれを横合いから掠め取った。

「……おい！？」

白澤が件を振り向くと、彼女はさっきのとは違うお茶を白澤に差し出した。

「まだ声がかすれています。そんな状態で煙管などくわえると喉に悪いでしょう」

「……」

正論なので言い返すこともできず、白澤は素直に件の差し出したお茶を受け取る。飲んでみると、喉にいい薬草でいれたものだと分かった。

「『医者の不養生』ってやつだね！」

などとちゃかす婆稚の頭をゴンッと殴り、白澤はぐ――っとお茶を飲み干す。

ふー、と一息ついた白澤に、殴られた頭をさすりながら婆稚は尋ねた。

「……ねえ。さっきの兄弟……」

「何ヶ月かおきくらいでちょいちょい来る奴らだな。遠いとこからご苦労なこった」

へっ、と、鼻で笑って、白澤は今度こそ煙管を口にくわえる。

いつのまにか件から奪い返したのだ。

「治さねぇよ」

婆稚の視線の意味を察したのか、白澤は言い放つ。

「あいつらは俺が治すべきモノじゃねぇ。つーか自分らで気づかねぇと治らねぇな」

「気づくって、何に？」

「あいつらの『病気』の『病原菌』にさ」

飄々と言う白澤に、婆稚は険しい顔で詰め寄る。

「なんで治さないの？　あんな言い方じゃ納得できないのも仕方ないよ」

いちいち抽象的な言い方をする白澤に、横で聞いていた婆稚が苛

立ちを覚えたくらいだ。当人であるあの青年なら尚更だろう。

「……」

白澤と件は顔を見合わせる。

ぽりぽりと頭を掻いて、白澤が言った。

「『自然治癒力』、って知ってるか、婆稚？　病気や怪我を自分で治す力だ。

これは俺にもお前にも、もちろんあの兄弟にだって、強弱はあってもみんなにある。

あいつらの病気はこの『自然治癒力』で治せるもの――いや、治すべきものであって、医者が手を出すべきものじゃねぇんだよ」

「……」

婆稚は、しばらく険しい表情のまま黙り込んでいたが、やがてすっくと立ち上がるとたたっと病院を出ていく。

ふーっと煙を吐き出した白澤に、件が尋ねた。

「止めないんですか？」

「別に。止めよーが止めまいがどっかスキ見て行くだろうし、行っても行かなくてもたいしてマズいことにはならねーよ」

†††††††††††††

あくまでも抽象的な言い回しをやめない白澤に愛想を尽かした婆

稚は、病院を出てあの兄弟を追っていた。

自分に何ができるかは分からない。できることなど何もないのかも知れない。

それでも、放っておくことはできなかった。

――あ……いた

婆稚が弟を背負った青年の姿を見つけると同時に、青年も婆稚の気配に気づいたのかこちらを振り向く。

「――君は……」

驚いたように軽く翠瞳を見開いた青年は、近づいてきた婆稚に尋ねた。

「どうした？　何か用があるのか？」

「用っていうか……どういう病気なんだろうって。白澤は教えてくれそうにないし、オレに何かできないかと思って」

「……そうか……」

青年は、おもむろに膝をつくと背中の少年を下ろして近くの気にもたれさせた。

そして、その隣に自らも腰を下ろす。

示されるままに婆稚も青年の隣に座り込んだ。

「おれは、セイ。弟はシンと言うんだ。君は？」

「オレ？　オレは、婆稚。」

そうかと頷き、青年――セイは両手を顔の前で組んで悔いるように瞑目した。

「シンがこうなったのは――他でもない、おれのせいなんだ」

カルテＮｏ．１２　九尾兄弟-１（後書き）

セイ、シン兄弟はオリジナル。

翠嵐丸たちのときもそうでしたが、オリキャラを出すと長くなるようです……九尾兄弟編続きます。

カルテＮｏ．１３　九尾兄弟-２（前書き）

今回回想シーンで微妙にグロ入りますので苦手な方ご注意下さい。

カルテＮｏ．１３　九尾兄弟-２

「……　見ィーつーけた♪」

婆稚とセイの上、木の葉に紛れて金の髪が見え隠れした。

†††††††††††††

「5年前、おれたちの一族は人間に襲われて――それで、おれたち2人だけが生き残った」

――一面血に染まった、紅の野。

人界に遊びに行って帰ってきた兄弟が見たものは、あまりにも凄惨な光景だった。

所々に見える白銀にどこか見覚えがある気がして、シンが呟く。

『……何、これ……？』

わけも分からないまま、シンは白銀に近づく。セイははっとして彼を後ろから抱きすくめた。

『――見るな……！！』

セイは、気がついたのだ。

一面の血の海に点々と転がる白銀、九尾狐の死体。その両目が、えぐり取られていることに。

『……あ』

同じく気づいてしまったシンが、そのあまりの惨たらしさに声を漏らした。

『嘘、だ……』

シンはセイの腕の中で頭を抱えた。

『う……あぁあぁっ！！』

セイの腕の中で、絶叫と共にシンの妖気が噴き上がる。

『シン！？』

セイは驚いて呼びかけるが、聞こえていないのかシンは反応しない。

『！　つっ……』

その妖気のあまりの激しさに、セイの腕に裂傷が走る。

紅が散るが、セイはそれでも弟を離さない。

『シン、シン！！　くそ……っ』

ぎり、とセイは奥歯を噛み締めた。

このままでは、妖気が枯渇してシンの命が危うくなる。

舌打ちをしたセイは、ぐっと右の手刀を構えた。

強行手段ではあるが、首筋を殴って気絶させようというのだ。

――しかし。

セイがその手刀をシンにぶつける前に、ふっとシンの妖気が消えた。

『！？』

同時に、操り人形の糸が切れたように脱力したシンを、セイは慌てて抱き留める。

『おい、シン！？　シン！！』

セイはシンの名を呼びながら必死に彼を揺さぶるが、シンの反応はない。

――それから。

5年間ずっと、シンは目覚めていない。

セイは裂傷の癒えた腕で頭を抱え、声を搾り出すようにして続けた。

「外傷は何もない
熱があるわけでもない
妖気だって安定してる
……それでも目覚めないのは、一体どうしてなんだ……」

「セイ……」

5年。

長命な妖にとっては、何ということのない時間だろう。

しかし、計都のいないこの数ヶ月すら婆稚にとっては長い。

ならば、目覚めない弟を抱える彼の5年とはいかばかりか。

何かセイにかけてやれる言葉を探していた婆稚だが、ふと思い至る。

現代、妖怪の存在を信じる人間は少ない。それが、5年前九尾狐を襲った？

「……ねえ。なんでセイの一族は人間に襲われたの？」

「それは……」

「それは、その瞳を人間たちが欲したからさ」

セイの言を遮り、ざっ、と、婆稚、セイの目の前に人影が降ってきた。

とさかのように一部が立った金色の髪、ひょうきんそうな垂れ目。深緑の縦縞スーツに右目の黒い眼帯がどこか異彩を放っている。

「妖界屈指の妖力を持つ妖狐族。その中でもお前ら翠狐(すいこ)族は、未来を視る力を持ってる。その瞳に、な」

ニィ、と、彼が笑う。

「オレは妖界専門のハンター、楠石千里。以後お見知りおきを……ってムリかぁ、オレはその目ェ奪いに来たんだもんなあ？」

†††††††††††

「……ハンター……」

立ち上がり、婆稚とシンを守るように前に出ながらセイが繰り返した。

「なるほどな……おれと弟の目を盗りに来たのか」

「いいや、依頼は1つだが……　たくさんあって困るってことはないぜ？」

それを聞いて、セイがふっと笑う。

「……そうか……なら、取引をしないか、ハンター？」

「取引？」

楠石が片眉を上げた。セイは続ける。

「そうだ。お前が、弟の病気を治せたら――治せるものを盗って来たら、おれの両目をやるよ。どうだ？」

「ほう……」

煙草（たばこ）をくわえて火をつけながら、楠石が眼帯をしていない左目でセイの後ろ――シンを見遣る。

「どんな病気かにもよるな。症状は？」

「5年間、目覚めない。理由も分からない。白澤は頼りにならない」

「えらく難題だな。それで2つだけか」

「おいおい、妖界屈指の妖力を持つ九尾の妖狐と戦わずして得られるんだぜ？2つがいいとこだろ」

どんどん進んでいく話に、婆稚は堪らず立ち上がって割り込んだ。

「お……おい！　セイ、そんなんでいいのかよ！？」

「構わない」

セイの答えに迷いはない。

「未来を視る翠（みどり）の瞳――とは言っても、その能力はコントロールできない。

もしコントロールできていたら、人間にむざむざ襲撃などされな

かっただろう。
その程度の瞳なら――それでも人間には充分貴重なんだろうが――おれは喜んで差し出そう。
それで弟が治るなら」
一片の躊躇(ためら)いすらなくセイが言い切った言葉に、楠石の顔から表情が消え、眼帯をしていないその左目がすうっと細まった。
†††††††††††††
ちっ、と、水鏡でそれを見ていた白澤が舌打ちをした。
「……それが『病気』だっつんだよこのバカ狐が！！」
苛立ちを隠そうともせず、白澤が水鏡に片手を突っ込み水面を乱して映像を消す寸前。
『そんなのダメだ！！』
婆稚の声が、白澤の耳に届いた。
†††††††††††††
「そんなのダメだ！！
それじゃ、シンが起きてもセイはその顔を見られないじゃないか！
自分のせいで兄ちゃんがそうなったって知ったら、シンだって辛いじゃないか！！」
自分の後ろで叫んだ婆稚の言葉に、一瞬ピクリとセイの体が強張る。しかし、セイは振り返らないまま言った。

「……それでも。おれは、弟が目覚めさえしてくれればいい。——たとえ、おれの命と引き換えにしても」

「そんな……」

婆稚はしゅんとして脱力するが、楠石はふんと鼻を鳴らした。

「決まりだな」

感心したような表情で婆稚の叫びを聞いていた楠石だが、セイの返答を聞いた途端冷めた表情に戻っていた。

くわえていた煙草を右手の指で挟み取り、ふぅっとその煙を吐き出した楠石はどこにともなく声をかける。

「サトリ」

「はい！」

ぼすっ、と楠石の後ろの茂みの中から、おかっぱ頭の少女が現れる。

フードのついた黒い上着に、同じく黒い手甲（てっこう）。太股までのソックスと、上着の下の半袖シャツは同じ網の生地でできている。

どことなく忍者を思わせる格好のその少女は、しゅたっと楠石の横に立って彼に向かい敬礼した。

「お呼びですか楠石さん！」

「おう。あの後ろのガキの心を読んで病気の原因を探ってみろ」

「はい！」

キリッと返事をしたサトリは、

「失礼します！」

そう言ってセイたちの横をすり抜けると自らも屈み、木にもたれて座らされているシンの胸元に触れる。

その瞬間、ふわ、とサトリの髪が浮き上がるように揺らめいた。

「……彼女は……」

サトリを目で追ったセイの呟きに、婆稚が答えた。

「“覚（さとり）”だよ。その名の通り」

「覚……」

その名だけでその性質、能力を察したセイは、黙って彼女と弟を見守る。

楠石も再び煙草をくわえてサトリとシンを眺めた。

やがて振り向いた彼女は、楠石ではなくセイを見て言う。

「……“兄さん”、と」

思わぬ言葉に、セイの瞳が揺れた。

サトリは続ける。

「あんなの嘘だよね。きっと兄さんがなんとかしてくれるよね。兄さんならなんとかできる……と」

「……そうだ」

サトリの伝えるシンの言葉に、セイは体の横で拳を握り締めた。

「頼りにされているから、だから――おれは、何としてもシンを治さなきゃならないんだ……！！」

「……クハハハハハッ！！」

さっきまで冷めた表情をしていた楠石が、突然笑い出した。

セイが振り向いて彼を睨む。

「……何がおかしい」

楠石はそれに怯むことなく続けた。

「ハハッ……　これが笑わずにいられるかよ。

結局お前ら兄弟は、どっちも本当の意味じゃお互いのことなんて考えちゃいねーんだ」

カルテＮｏ．１３　九尾兄弟-２（後書き）

予告通り楠石さん出せました！（^＿^）ｂ

次回もまだ出ます。というか九尾兄弟編長いな～……ｆ^＿^；

カルテＮｏ．１４　九尾兄弟-３

「……何だと？」

セイの翠瞳が鋭く煌めく。しかし、その眼光に堪えた様子も見せずに楠石ははっきり言い切った。

「はーおかし……
いいこと教えてやるよ、翠狐の兄ちゃん。お前の弟はお前を頼りにしてるんじゃない。
お前に依存してるんだ」

楠石はにぃぃと口角を吊り上げた。

「そして、お前も。弟を治したいと思うのは、自己満足でしかねえんだろ？」

セイがかっとして楠石に怒鳴る。

「ふざけるな、弟を治したいと思うのは当然だろう！
自分をなげうって奔走して、それを何故非難されなければならない！！」

今度は楠石の目が鋭くなる番だった。

「そら見ろ。自分のことには反発しても、弟のことには食いつかない。
それに、“自分をなげうって奔走して”、ボロボロになった兄貴を見て弟がどう思うかなんて、一切考えちゃいねえんだろ？」

セイがぐっと言葉に詰まる。厳しい口調で楠石は続けた。
「相手の目に映る自分を見てるだけで、相手のことなんか見ちゃいねえ。
お前は、“弟を助けるために奔走するいい兄貴”を見たいだけなんだ」
突き刺さるような楠石の言葉に、セイは否定も出来ずただ俯いて拳を震わせる。
ふう、と一息ついて、くわえた煙草(たばこ)をいじりながら冷めた様子でそれを眺めていた楠石は、不意にその目を見開いた。
「逃げろお前ら！！」
†††††††††††
楠石のその声に反応する間もなく、セイは何者かに後ろから羽交い締めにされる。
「！！」
必死に首を巡らせてセイが背後に視線を送ると、そこには全身黒ずくめ、黒い布で顔を隠した人間のような姿があった。
それが纏う空気を感じた瞬間、セイが瞠目する。
「……お前……！！」

同時にセイは、一気に妖気を練り上げると自らを中心に爆発させてそれを弾き飛ばした。

元々吊り気味だったセイの目元がさらに吊り上がる。

「おれたちの里を襲った奴らか……！！」

あのとき、翠狐族の血で染め上げられた野に残っていた微かな人間の匂いと、彼らが翠狐族に使ったのであろう術の痕跡。

それと同じものが、今セイを羽交い締めにしていたモノから滲み出ていた。

「うりゃあぁぁぁっ！！」

セイが羽交い締めにされると同時に背後から俯せ（うつぶ）に押さえ付けられた婆稚は、持ち前の怪力でそれを跳ね退ける。

が、その手応えに違和感を覚えて婆稚は眉根を寄せた。

「……！？」

ちっ、と舌打ちをしてスーツの袖から拳銃を滑り落とした楠石は、それを構えて叫ぶ。

「サトリ！！」

黒ずくめに顎の下に腕を入れられ、首を絞められていたサトリは、楠石に頭を撃ち抜かれたそれの腕を振り払った。

タッとサトリに駆け寄った楠石は、彼女を庇うように立ちながら血を流すことすらなく倒れて灰燼（かいじん）と化していく黒ずくめを見て唸る。

「……式神か……！！」

灰燼の中から、人の形に切り抜かれ頭の部分を撃ち抜かれた紙が現れて風に飛ばされた。

†††††††††††††

「……おい！　何だよこれ！？」

怒鳴りながら、婆稚は次から次へと湧いて出る黒ずくめをそれこそちぎっては投げちぎっては投げという風情で倒していく。

しかし、それよりも速いスピードで黒ずくめは新たに湧き出していた。

「くそっ……」

吐き捨て、セイはシンに手を伸ばしていた黒ずくめを蹴り飛ばすと弟を小脇に抱え上げる。

そして、よく通る声を張り上げた。

「――おい！　狙いはおれたちの瞳だろう、ついて来い！！　他の奴らに手を出すな――」

その語尾に、銃声が重なる。

ぱっとセイが音のしたほうを見ると、セイに襲い掛かろうとしていた黒ずくめを撃った楠石がくわえていた煙草をプッと吐き捨てていた。

サトリを自分にしがみつかせた彼はセイを睨んで言う。

「ふざけるなよ。お前はオレの獲物だ」

「ちっがう、うちの患者だよ！！」

拳の一突きで数体の黒ずくめを吹き飛ばしながら婆稚が叫んだ。

思わぬ反応にしばし唖然としていたセイは、婆稚の次の言葉に反応し損ねた。

「セイ、危ない！！」

バチィッ、と大きな音がして、セイの体が電流に貫かれた。

†††††††††††††

「セイ！！」

「……う……あ」

無様に倒れ、土を掻くセイの体には、パチパチと小さく爆ぜる電流が纏わりついていた。

そしてその背中には、何やら複雑に図案化された文字の描かれた札が張りついている。

とっさにシンを投げ出したために彼に被害はないが、投げ出されても眠り続けたままのその体に黒い手袋をはめた手が伸びた。

軽々とシンを肩に担ぎ上げ、その黒ずくめは言った。

「……全てが式神だと思ったか？」

空いたほうの手で顔を隠している布を持ち上げ、男は笑った。

†††††††††††

「……ふっ……う……」

唸りながらセイは男を見上げるが、全身に力が入らず立ち上がることができない。

自分の獲物を横取りされては堪らない、とばかりに楠石が拳銃の銃口を男に向けるが、気づいた男が屈んでどこからか取り出したナイフをセイの首筋に当てる。

「！！」

楠石、そしてシンを奪い返そうと密かに距離を詰めていた婆稚の動きが止まった。

銃を下ろした楠石が口を開く。

「……おいおいお前さん、そんなことしていいのかい？

翠狐の瞳は、“生きたまま”刈り出さねえと未来を視る力は消え

るんだぜ？」

いつものひょうきんな笑顔のようだが、内心には焦りがあるのかどこか引き攣って見える。

男は平然と答えた。

「知っているさ。だが、我らは既に十分な量を手に入れている。他人に奪われるくらいならば消すも一手」

ぐっ、と、婆稚、楠石がほぞを噛む。

すると、おもむろに男がスッと式神の黒ずくめたちに目配せをした。

セイの首筋にナイフが突きつけられたままであるため、抵抗することも出来ず婆稚、楠石、サトリまでもが黒ずくめに腕を掴まれるなどして拘束される。

「くっそぉ……」

婆稚が呻いて、どこかに隙がないかと視線を走らせる。

その目に、男の肩の上で眠り続けるシンの姿が映った。

「――――シン！！」

黒ずくめに後ろ手に拘束されたまま、じたばたと暴れながら婆稚が叫ぶ。

「シン！！　起きろよ！　お前の兄ちゃんが危ないんだ！！」

突然何を言い出すのかと、楠石、サトリが婆稚を見る。

しかし、彼は叫ぶのをやめない。

「自分の兄ちゃんだろ！！　いつもいつも守られてばっかで、たまには自分が守ってやろうとか考えないのかよ！？」

ピク、とシンの指先が微かに震えた。

それには気づかず、婆稚は続ける。

「起きろ、シン！！　逃げてたって何も変わらないんだ、今セイを助けられるのはお前だけなんだよ！！」

――にいさ……ん

シンのまぶたが、震えた。

†††††††††††††

婆稚の叫びをフンと一蹴し、男はナイフを捨てセイの顔に手を伸ばす。

「……さあ。その目を貰おうか」

男の指が、セイの左目の周囲の皮膚にわずかにめり込む。

その瞬間、どうと音をたてて白銀の妖気が噴き上がった。

「な……！？」

男はもちろん、セイ、楠石にサトリ、婆稚もその妖気の塊を見つめた。

しかし、その一瞬の無言を男が引き裂く。

「うぁぎゃあぁぁあぁあぁぁッ！！」

白銀の妖気は炎となって、男に燃え移りその黒い衣装も肉体も灼き始めたのだ。

男に担がれていたシンが、ばっとその腕を振りほどきセイの隣に着地する。

「……シン……？」

呆然と自分を見つめる兄に、シンは恥ずかしそうに笑って見せた。

「……おはよう。兄さん」

シンはセイの背中の札に手を伸ばす。だが、シンの手が札に触れる前に、札は一際激しい電流をシンの手に向けて放った。

「……っつ……」

「シン！！」

セイが悲鳴じみた声を上げたが、当のシンは笑って見せた。

「大丈夫。僕がやる」

きゅっと表情を引き締めると、シンはベリッと一気に札を剥ぎ取った。

体を縛っていた電流が消え、セイはばっと立ち上がる。

その前に、黒ずくめの拘束を解いた婆稚、楠石、サトリが立った。

シンもセイの隣に立ち、一歩前に出る。

その姿を見て、セイはわずかに目を細めた。

――ああ、こいつは。

もう、守られるだけの弟じゃない。

カルテＮｏ．１５　九尾兄弟－４

セイ、シンの前に婆稚たちが立ちはだかる。男は、白銀の炎を振り払うと呼吸を乱しながらもぎっと彼らを睨みつけた。

その姿を見て、婆稚が不審げに呟く。

「……焼けてない？」

炎に包まれ火だるまになっていたはずなのに、よく見ればその衣服も肌も焼け爛れてはいなかった。

「だって狐火だもの。
不意打ちだったからうまくいっただけで、あれは『炎は熱い』っていう相手の意識を利用した幻覚でしかないから」

シンが悔しそうに言った。

ふ――っ、ふ――っ、と荒れた息で男が唸った。

「……私が、この私が狐火ごときに騙されるとはな……　気に入らない……実に、気に入らない……」

呪詛のように繰り返しながら、男は左手の親指に歯を立て血を滲ませると懐から出した数枚の呪符にばっとなすりつける。

そしてそれを、婆稚たちのほうに投げつけた。

投げられ、その呪符は空中で無数に分裂しその１つ１つが漆黒の

狼の形を取る。

ちっ、と黒狼に囲まれ楠石が舌打ちをした。

「あーもーヤだねぇ往生際の悪い奴は！」

ダダダダッと楠石の拳銃が火を噴く。

婆稚も、その小柄な体格を生かしてちょこまかと走り回っては手当たり次第に黒狼を殴り飛ばしている。

サトリは楠石に同行するうちに身についたのか、攻撃こそしないまでも軽々と黒狼の突撃を躱して無傷を保っていた。

妖気の解放と共に、人間の形に9本の尾と耳、爪と牙を具現化させた白銀の九尾兄弟は、伸びて尖った爪で空を裂く。

「らァッ！！」

「やぁっ！！」

その軌跡は空中で巨大化し、そのまま刃となって黒狼たちを斬り払った。

しかし、黒狼は傷ついても傷ついても立ち上がる。九尾兄弟の爪撃で真っ二つにされた黒狼でさえ、2頭に分裂して再び兄弟を襲った。

だが、背中合わせで戦う白銀の兄弟に隙はない。

自分が斃(たお)れれば兄弟の背中が危ないという責任感、そして初の共闘という興奮が2人の士気を高めていた。

いつもいつもセイがシンを庇って戦っていたので、連携プレイなど初めてだったが、1度ピースが嵌まってしまえば外れることはなかった。

それを横目で見た婆稚の胸がつきりと痛む。

――いいなぁ……

いつか強くなって、それで。

羅喉、計都と背中を守りあって戦ってみたかった。

そんなことを考えていた婆稚は視界の端に自分に向かって猛突進してくる黒狼を捉え、躱すために慌てて身を捻ろうとする。

「あ、やばっ……」

思ったより疾(はや)い黒狼の突進に、婆稚は避けきれないと直感しせめてと身を固くする。

しかし、その目の前で黒狼は白銀の刃に跳ね飛ばされた。

婆稚が慌てて視線を走らせると、空間を引き裂いたそのままの姿勢でシンがにこっと笑ってみせた。

†††††††††††††

たかが妖の幻覚に惑わされたとあっては男の矜持が黙っておらず、彼はぎらついた瞳で九尾兄弟を睨み据える。

「もはや『目』などどうでもいい、全て喰らい尽くすがいい式神たちよ！！」

「そりゃ困るなぁ～」

間延びした声と共に、ガチャンと音がして男の後頭部に筒が突きつけられる。

いつの間にか男の背後にいた楠石が、彼に銃口を向けていた。

「貴様……」

呪詛にも似た低い声に怖気づくこともなく、楠石は銃を持っていないほうの手でマイペースに懐を探ると1枚の札を取り出して男の首に貼りつけた。

「ぐっ！？」

その瞬間、男は呻いて膝をつく。それと同時に大量の黒狼も消え失せた。

ぐぐ、と男が振り向いて唸る。

「……きさ……ま、何、を……」

「楠石サマ特注のおフダだよ。一時的に貼りつけた相手のチカラの流れを止める――つまり、術を無効化する」

ニヤリと笑い、拳銃をしまって手早く男を縛り上げた楠石は九尾兄弟に声をかけた。

「どうすんだい、兄サン方。こりゃあんたらの仇なんだろ？」

「……どうするって、言われてもな……」

セイが困惑したように呟いた。

そもそもセイは、仇討ちなどより弟を治すことを優先して駆けずり回っていたから、仇への怨みになどかまけている暇はなかったのだ。

ちら、とセイがシンを見ると、彼もよく分かっていない顔をしている。

その様子を見て、楠石はにぃと人を喰ったような笑みを浮かべると男の耳元でねちっこく囁いた。

「術師さんよ　どうやらあんたは、復讐する価値すらない小物だと思われてるみたいだぜェ？」

ぐっ、と男が唇を噛む。

矜持の高い男にしてみれば、これは屈辱以外の何物でもなかった。

楠石は笑顔を爽やかなものに切り替えて言う。

「じゃあこいつはオレが貰ってくぜ　出すトコに出しゃカネになる」

へ、と婆稚が尋ねた。

「？　なんで？」

「こいつが使った札の模様、ありゃ葛破(くずは)一族とかいう悪徳陰陽師のもんだ。正規の陰陽師たちの間じゃ賞金首なんだよ」

賞金首、と聞いて婆稚が首を傾げた。

「でもお前だって賞金首じゃんそういや」

「そりゃ妖界での話だ。人界じゃただのカッコイイオニーサンだよ」

つーかお前言うな、と婆稚に向かって笑顔のまま額に青筋を立てる楠石を複雑な表情で見ていたセイは、急に眩暈(めまい)を感じてくらりとよろめいた。

「兄さん！！」

慌てたシンに支えられるセイを見て、新しい煙草(たばこ)をくわえて火をつけた楠石が言う。

「さっき電流で縛られてたのの後遺症か何かか。白澤に診て貰え」

「……、お前」

まるで彼を心配するかのような言葉に、セイは翠(みどり)の目をすがめて楠石に尋ねた。

「おれたちの目を狙ってたんじゃないのか？」

婆稚とシンがはっとする。

そういえばそうだった。

「……そうだなぁ……」

周囲が緊迫して見守る中、静かに口角を吊り上げた楠石はしまっていた拳銃をゆっくりと取り出して銃口を九尾兄弟に向ける。

「待……」

婆稚が言い切る前に、白い手袋に包まれた楠石の指が拳銃の引き金を引いた。

†††††††††††††

しかし、ガチンッという音がしただけで銃口からは何も出ない。

「……え？」

ぎゅっとセイのシャツを握っていたシンが間の抜けた声を出した。

「残念。弾切れ」

にいっと楠石が人の悪い笑みを浮かべる。

「っつーわけで今お前らとやり合うつもりはない。手負いとは言え九尾２匹と武器もなしに戦うなんてワリに合わねぇ仕事するかよ」

クルクルと片手で拳銃を回しながら楠石は続ける。
「心配しなくとも依頼主からは前金貰ってるし、賞金首も捕まえた。1日の仕事としちゃ十分だ。
素直に帰るとするさ、じゃあな」
ストッと拳銃を元通りスーツの袖に落とし込んだ楠石は、男を縛っている縄の端を持つとオラ歩けと命令して引き連れていく。
サトリも婆稚と九尾兄弟に一礼するとたたっと楠石を追いかけて行った。
「……っ」
彼らの姿が遠くなったころ、ふら、と今度は本格的に体勢を崩してくずおれかけたセイをシンと婆稚の2人がかりで支えた。
「兄さん、大丈夫！？」
悲鳴のような声を上げるシンに大丈夫だと返し、セイはやんわりと婆稚の手を払いのける。
「――世話になった。白澤様と件様にもよろしく伝えておいてくれ
……行くか、シン」
「え、でも……」
困惑するシンと共に立ち去ろうとするセイのシャツを、婆稚が後ろから引っ張った。

「あのハンターも言ってただろ。一度白澤に診て貰いなよ」

「……しかし……」

セイは翠瞳を泳がせる。

出したままの9本の尾も不安げに揺らめいた。

「行っても、おそらく診ては貰えないだろう。何度も断られたし――」

「そんなの行ってみなきゃ分かんないだろ。白澤なんて気まぐれなんだから」

「そうだよ兄さん、行ってみようよ。僕心配だよ」

「……」

婆稚とシンの顔を見比べ、やがて根負けしたようにセイは目を閉じて頷いた。

「――分かった」

カルテＮｏ．１５　九尾兄弟-４（後書き）

え……と、まだ続きます九尾兄弟編。次回で本当の本当にラストです。多分。

ところでお気づきの方もいらっしゃるかと思いますが、今の時点でこの九尾兄弟と翠嵐丸、瞳の色被ってますね？

元々どちらも違うお話のキャラクターで、こうして同じ物語に出すことになるとは思わなかったので……ｆ＾＿＾；

とりあえず、暇なときにでも翠嵐丸のほうの髪と瞳の色を入れ替えておきます。九尾兄弟のほうを変えるとややこしいので；

翠瞳の狐は許せても毛並みが翠の狐は許せまい……　かと言って翠を諦めると翠狐族という呼称も変えなければ……

次回もまだ楠石さん出ますよー（＊＾ｏ＾＊）

カルテＮｏ．１６　九尾兄弟-５

「……」

煙管（きせる）を口にくわえて揺らしながら、白澤は耳や尻尾を消して彼の前に正座する九尾兄弟を品定めするように見比べていた。

きりりとした印象を抱かせる兄に比べ、シンはどこか和やかな雰囲気を纏っているから普段はあまり感じられないが、こうして真剣な表情をしていると吊り気味の目元などがよく似ているのが分かった。

人間で言うと１３歳程度の容姿をしているシンは、派手めのファッションを身につけているセイよりも地味な服装だ。

Ｔシャツの上に無地のパーカーを重ね、カーゴパンツにスニーカーという格好は、生真面目な優等生がとりあえず私服を着ましたというような印象を抱かせる。

やがて白澤は頭を掻いて言った。

「……まあ、いいだろう。セイ、ついて来い」

「え……　あ、はい」

まさか相手にしてもらえると思っていなかったセイは、おっかなびっくりという様子で立ち上がると白澤について奥へと歩いていく。

見送るシンの隣にどかっとあぐらを掻いた婆稚はシンに話しかけ

た。

「よかったな、兄ちゃん治してもらえることになって」

にひっと笑う婆稚にシンは柔らかく笑い返した。

「うん。ありがとう」

礼を言われ、婆稚はぱちくりと目をしばたいた。

「オレは何もしてないよ。白澤の気まぐれさ」

「そうかな？　僕は、そうは思わないよ」

シンは笑った。

「君が、僕を起こしてくれたから。そして、あのハンターさんが兄さんを叱ってくれたから。

僕ら兄弟の『病気』を君たちが治してくれたから、白澤様は兄さんを診る気になったんじゃないかな」

だが、婆稚は首を傾げる。

「そうかなぁ……

オレは、ただ叫んでただけだよ。気がついて治したのは、自分だろ？」

シンは軽く目を見開くと、そうなのかな、と照れたように笑った。

†††††††††††††

「……別に叱ってねーよ」

病院内の岩影で、楠石はくわえた煙草(たばこ)をいじりながら呟いた。

そこに、件が薬瓶を持ってやって来る。

「報酬の薬です。弟君に効かなければお好きに売り飛ばして下さい」

どうも、と差し出された薬瓶をスーツのポケットに入れた楠石は件を見据えた。

「――なあ、件さん。あの兄弟にオレをぶつけたのは、何でだ？」

翠狐(すいこ)族の瞳を盗め、などという依頼は受けていない。前金云々のくだりも嘘だ。

まさか葛破の陰陽師が出てくるとは思わなかったが、実際に受けたのは、九尾兄弟を白澤に診てもらえるようにして欲しい、という件の依頼。

「わざわざオレに依頼しなくても、あの婆稚とかいう子鬼だけでもよかったんじゃないのか？

あいつにも『兄弟』はいるだろう」

「確かに。ですが彼は『弟』ですから。私の知人に『兄』はあなたしかいなかったので」

セイに対し、柄にもなくムキになってしまったことが気に入らないのか、楠石の表情は険しい。

「……オレはただあの兄貴が気に入らなかったから、気づいてねぇ裏の部分を暴いてやっただけだ。
その後あいつらがどうなろうがオレの知ったことじゃない」

苛立ちを滲ませる楠石の姿を見て、『オレは弟のために生きなきゃなんねぇんだ』――そう言い切った少年の姿が件の脳裏に鮮やかに浮かび上がる。

弟のためなら死をも厭わないと言い切るセイの姿は、彼にとっては決して愉快なものではなかったようだ。

弟を想うという点では同じなのに、全く正反対の考えを持つ2人の『兄』。

件は、楠石ならばセイの『病気』に気づいて指摘できるかも知れないと思ったのだ。

「それで構いません。貴方の仕事は『九尾兄弟を白澤殿に診てもらえるようにすること』ですし
……白澤殿は、自分の決めたことを覆しませんから。たとえ、それで自分自身が苦しむことになっても」

台詞の後半は、楠石にというよりは独り言のように呟いた件の脳裏に、今度は九尾兄弟を追い返したときの白澤の苦しげな表情が浮かぶ。

そんな顔をするのなら診てやればいいものを、彼は頑として自分の決めたことを曲げようとしない。

「……それでオレに依頼、ね」

面白くもなさげに楠石が呟く。

そのとき、白澤とセイが奥から出てきた。

†††††††††††††

正座したシンに向け、白澤が小さな缶を放り投げる。

「碧鬼草（あおおにくさ）の軟膏な。呪札貼られた背中が痣になってっから、お前が塗ってやれ。

1日1回、痣が消えるまで毎日。痣が消える前に軟膏がなくなったらまた来い」

「分かりました」

大事そうに軟膏の缶を握り締め、シンはそれを服のポケットに入れる。

婆稚とは反対側のシンの隣に正座したセイもすっと白澤に頭を下げた。

「……オレは」

彼らの前にどっかと座り込んだ白澤が口を開く。

「自分から生きようとしない奴を治す気はない。

誰かのためだと嘯（うそぶ）いて自分の命を疎かにする奴も、誰かに頼りきって自分じゃ何もやらない奴も。」

誰のことを言われているのか悟り、兄弟はすっと背筋を伸ばした。
セイが再び頭を下げる。
「――すみません」
シンも慌ててそれに倣う。
眠っていた間の詳しいことは知らないが、兄が謝るのなら自分だって謝るべきだと思ったのだ。
何しろ、白澤の言う『誰かに頼りきって自分じゃ何もやらない奴』は、自分なのだから。
2人に頭を上げさせ、白澤はセイに尋ねた。
「オレが最初から言ってた、『治すべきはオレじゃない』、そして、『治すべきは弟だけじゃない』。この意味、もう分かるな？」
「はい」
「よし」
満足げに頷き、白澤は今度はシンに言った。
「『弟』であることに甘えるなよ。お互いのためにならねぇからな――背中合わせ、心地よかったろ？」
ニヤリとした白澤の言葉に素直に頷こうとしたシンだったが、ふ

とあることに気づいて絶叫する。
「――見てたんですかっ！？」
「うん？　ああ。助手がどこ行ったのか探すついでに」
あ、と婆稚が声を上げた。
本当は九尾兄弟が気になって水鏡で姿を追っていたのだが、冷たく追い返しておいてそんなことは言えないので婆稚をいい隠れみのにしているだけだったりする。
「まあいいじゃねぇか、終わり良ければすべて良し、って奴だ。そんでお前ら、これからどうするんだ？」
セイとシンは顔を見合わせ、やがてセイが口を開いた。
「――1度、故郷に帰ろうと思います。たとえ悲劇が起こった場所だとしても、生まれ育った地に違いはないので」
すう、と白澤の目が細まった。
「復讐は、しねぇんだな？」
九尾兄弟は、揃って頷いた。
『はい』
「ならいいんだ。んなことしたって何にもなりゃしねぇからな」

白澤はニッと笑う。だが、その瞬間チカッとシンの翠瞳が光った。

「あ……」

その一瞬で、シンの網膜にいくつかの光景が走り抜ける。

しばらく身動きしなかったシンは、やがてゆっくりと婆稚を見た。

「……友達とのお喋りには、気をつけて。その後には、きっとすごくいいことがあるから」

「え？」

シンの言葉の意味が分からず、婆稚は不思議そうな顔をする。

白澤はほう、と感嘆した。

「それが翠狐族の『未来を視る力』、ね。初めて見たぜ」

シンはえへへ、と笑った。

「視えるものは抽象的だったりするんですけどね。逆に分かりにくいことも多いですし……」

†††††††††††

九尾兄弟が去った後、白澤は誰にともなく呟いた。

「……昔。治せただろう患者を、死なせちまったことがあるんだ」

「……え」

婆稚が驚いて白澤を見上げる。彼は、透明な表情で続けた。

「そのときは、患者が2人いてな。1人は、早いうちに適切な処置を施せば助かるだろう患者だった。もう1人は――――……」

白澤は、痛みをこらえるかのように目を細めた。

「――自分から生きようとしない奴だった」

†††††††††††

「何度も何度も、無茶して怪我しては家族に病院送りにされる。そんな奴だったよ」

「……」

初めて聞く白澤の昔語りを、婆稚は神妙な面持ちで聞いている。

――大切な話だと、思ったから。

「死にたがり……というよりは、本当にどうでもいい、って感じだったな。オレは、躍起になってそいつに生きたいと思わせようとしてた。――無理だったけどな」

白澤は苦笑する。どこか、自嘲の混ざったような顔で。

「その日も、そいつは怪我してやってきた。……つーか、家族に連

行されてきたって感じか。
近道だからって崖っぷち通ったら崩れて落ちたとか。アホかっつーの」

「……」

気がつくと、婆稚の隣に件もやってきていた。

件も、そのときその場にいたのだろうか。

「そのときそいつは意識不明出血多量の重体でな。ほぼ同時に運び込まれたもう1人の患者は、高熱こそ出ちゃいたがそいつほど緊急じゃねぇと思って後回しにしちまったんだよ。
……それが間違いだった」

顔を歪めるでもなく、拳を握るでもなく。ただ淡々と白澤は言葉を紡ぐ。

「そいつの手術を件と二人でしてる間に、高熱の患者は容態が急変したらしくてな。手術が終わってそれに気づいて、慌てて手を尽くしたんだが」

はは、と乾いた声で白澤は笑った。

昔、と言うが、どのくらい前の話なのだろうか。少なくとも、クロを弟子にするよりは前のような気がする。

「結局、何も出来ずに死なせちまった。そんで、そのときは助かったその生きる気のない奴も、そのうちまたバカやって今度は即死。
……もしあのとき、治療する順番が逆だったら、高熱だった患者

は今も元気に生きてたかもしれねぇ。
――1人でも、多く救えたかもしれねぇ。
だからオレは、自分から生きようとしねぇ奴ぁ治さねぇ、と決めたんだ。」

それは、その死なせてしまった患者に償うために、同じことを繰り返さないようにだろうか。あるいは、治せたであろう患者を治せなかった自分へのけじめか。

それとも、自分から生きようとしない者への怒り？

――あ

ふと、婆稚の耳に天空鬼界での白澤の台詞が蘇る。

『どう頑張っても救えねえモノもいる……』

あれはひょっとして、その『自分から生きようとしない奴』のことでもあったのだろうかと、それきり黙った白澤を見上げて婆稚はぼんやりと考えた。

カルテＮｏ．１６　九尾兄弟-５（後書き）

白澤の、『自分から生きようとしない者は治さない』というスタンスには、賛否両論あるかと思います。

白澤からそういうことを指摘しないのは、《お話の都合》……と言ってしまうとなんですが、自分で気づかなければ、自覚しなければ無意味だと彼が考えているから。

それとなくヒントっぽいものは、セイの訪問時のようにぼそっと言ってはいるようです。

けれど、セイが楠石に噛みついたように、指摘しても相手が認めないことは多いです。

それにいちいち対応していると、それこそ高熱の患者を死なせた二の舞になるので、そういう場合はあまり踏み込まないようにしている設定です。

白澤のスタンスには、『自分から生きようとしない者』に手をかけることで、『自分から生きようとする者』を死なせてしまった、もうそんなのは嫌だ――というのもありますが、相手のためにならない、というのもあるのではないでしょうか。

甘やかしてはいけない、というのと同じです。

長々と語ってしまいました、これにて九尾兄弟編完結となります。

次話をお待ち頂ければ幸いです。

カルテNo．17　獏

「白澤――――っ！！」

白澤病院に飛び込んできたのは、５人の獏（バク）たちを抱えたアミキリだった。

――いや、抱えた、というのは語弊があるか。

実際抱えているのは両のハサミに1人ずつで、後の3人はアミキリの肩なり頭なりに乗っかっている状態だ。

エビに似た姿の妖・アミキリは白澤に訴えた。

「なんかみんなぐったりしてんだ、どーなってんだよ！？」

「あー、はいはい。どーどー」

アミキリは動転しているが、白澤は落ち着いたものだ。何故なら。

「風邪だな」

病院の床に布団を敷き、1列に寝かせた獏たちの熱を測ったり口の中を覗いてみたりした白澤は言った。

「満月（ミツキ）が熱、無月（ムツキ）が鼻水、三日月（ミカヅキ）が喉、半月（ハツキ）が咳、十六夜月（イザヨイツキ）が頭痛……」

とまあこのように、同じ風邪でも人によって症状が違うのがこの

病気の厄介なところである。

まず薬を出すのが一苦労だ。

「婆稚、いいか？　『無月』の袋には解熱剤入れて、『満月』が喉、『三日月』は咳……」

と白澤が言えば、婆稚は

「え、『満月』が熱で喉は『半月』じゃなかったっけ？」

と言うし、アミキリはアミキリで

「違う、『三日月』が喉で咳は『半月』だ……」

などと言い返す。

とりあえず各薬袋に獏たちの名前を書き終わった件だけが1人手持ち無沙汰そうにしていた。

……問題なのは、風邪の症状が違うことだけでなく、5人の獏の顔や名前が似ていることもだったらしい。

†††††††††††††

さて、10分後。

それぞれ満月、無月……と名前の書かれた紙が、『熱』『鼻水』など症状を書いた石でそれぞれの枕元に留められていた。

「よォしこれで間違うまい。つーわけで婆稚、薬の袋詰め頼む」

「はーい」

もう既に疲れている様子の白澤は、笑っているのに口元は引き攣り顔は若干青ざめているという壮絶な表情をしていた。

件からそれぞれの名前が書かれた薬袋を貰い、婆稚はその場にあぐらを掻いて目の前に積まれている風邪薬の山と向き合った。

これは最初に白澤がまとめて持ってきた薬で、これの仕分け・袋詰めの際にあの誰がどの症状論争が巻き起こったのだった。

「え〜、と……？」

薬袋に『満月』と書いてあるのを確認し、婆稚は解熱剤を選んで袋に入れていく。

次に無月の袋を手に取った。

その間にも、白澤や件、アミキリは忙しく獏たちの看病をしている。

熱を出している満月の額に濡らした布を乗せようとして、うまく布を絞れずに四苦八苦しているアミキリに白澤が呆れた目を向けた。

「……そりゃハサミじゃムリだろうよ。変身しろ」

「あ」

自分が変身できることに今思い至ったという風情で、アミキリはぱっと一瞬でその姿を変える。

露出の多いパンキッシュな衣装に、前髪の一部に赤でメッシュの入った金色の髪。

人界では、美容師『アミ』として通っている姿だ。

きゅっ、と、器用に布を絞ったアミは、それを満月の額にそっと乗せて彼の髪を優しく撫でた。

「早くよくなれよ、みんな……」

その姿を見て、婆稚はアミに計都の姿を重ねる。

自分は今まで風邪に限らず病気1つしたことがないが、もしも自分が風邪を引いたら彼女はこうして看病してくれただろうか。

――してくれただろうな、たぶん……

いつも強気で、ときに意地悪で。それでも優しかった姉の姿を思い出す。

同時に、常に強さを求めていた兄の姿が脳裏を掠めた。

「……」

ぴたりと婆稚の薬を袋に詰める手が止まり、彼の表情が一瞬曇る。しかし、それは一瞬に過ぎなかった。

「やっば……！！」

次の瞬間には婆稚の表情は焦燥と恐慌に彩られる。

途中から無意識に袋詰めしていたので、誰の袋に何の薬を入れたのか分からなくなってしまったのだ。

「やばいやばいやばい……！！」

大慌てで婆稚は全ての袋をひっくり返す。その後で、『満月』の袋だけはちゃんと解熱剤を入れたことを思い出し婆稚は頭を抱えたくなった。

「うわあ余計なことやっちゃったよもう……！！」

ちなみに、パニックが起こっているのはそこだけではなかった。

†††††††††††††

「あ、やべ、薬間違って飲ませちまった」

「何やってんだアミキリィィィィ！！」

白澤の絶叫が病院に響いた。

「誰に何飲ませたんだよ！？」

「えーと、半月の薬を十六夜月に飲ませちまった……」

あさってを眺めながらアミは正直に白状する。

対して白澤はその薬の特性をぱっと思い浮かべて十六夜月の症状と照らし合わせた。

「……ああくそ十六夜月本人の薬と飲み合わせ悪いじゃねぇかっ！！もういい！　今日はこいつらに薬飲ますな、オレが今から最大公約数調合してくっからそれだけ飲ませてろ！！」

そう言い残して奥へと駆け込んで行った白澤の背を見送り、婆稚は件に尋ねた。

「最大公約数って？」

「この場合は、より多くの症状に効く薬のことですよ。ただ、そうなると効力そのものは弱くなるので、広く浅く、ということになりますね」

それぞれの症状に合った薬をピンポイントで飲ませたほうが治りは早いのだが、間違って飲ませるよりはマシだと思ったらしい。

まあ確かにその通りだろうと、婆稚は1人心の中で頷いた。

†††††††††††

1人で5人もの面倒を見るのは大変だと、その日はそのまま獏たちとアミは白澤病院に泊まった。短期の入院と付き添いということになるだろうか。

翌朝、昨日と比べるとずいぶん調子のよくなった獏たちに白澤は1人ずつ名前を呼んで婆稚が詰めた薬袋を渡していった。

「満月ー」

「はーい」

「無月」

「はい」

全員に薬が行き渡ったところで、白澤は膝を折って獏たちと視線の高さを合わせると怖い顔をする。

「絶ッッッ……対に自分の薬飲めよ　交ぜたり交換したりなんか絶対するなよ」

「「「「「……はい……」」」」」

何だかよくは分からないがとりあえず迫力に負けて獏たちが頷くのをしっかりと見届けてから、白澤は退院していく彼らを見送る。

その後ろで、件が不意に咳き込んだ。

「おいおい、大丈夫か？　獏たちの風邪貰っちまったのかしょーがねーなはっはっは」

妙にハイテンションな白澤の顔を見て、件がぼそっと言う。

「……貴方も顔が赤いのですが」

「へ？」

自覚のない白澤の顔は、確かにいつもより赤く見える。

それをどこか冷静に観察していた婆稚は、急に鼻がむず痒くなってきて顔を歪めた。

「……ぶぇっくしっ！！」

大きなくしゃみをした婆稚は、白澤と件に注目されてへへへと笑った。

「……なんが、あなづばっでるがも。」

なんか、鼻つまってるかも。

「……」

「……」

「……」

3人は黙って顔を見合わせる。

――白澤病院臨時休業決定の瞬間であった。

カルテＮｏ．１７　獏（後書き）

原作では獏たちの名前は満月、無月、三日月しか出ていないので、半月、十六夜月の名前は私の捏造になります。

いわゆるインターバル回、目指すはドタバタ劇でした。（^＿^）

助手日誌・Ｐ４　天空鬼界－４（前書き）

随分遅くなってしまいました申し訳ありません……！！

助手日誌・Ｐ４　天空鬼界-４

「……っていうことがあってさあ。結局オレも白澤も、件まで風邪引いちゃって。大変だったんだぜー」

あっけらかんと笑う婆稚に、翠嵐丸もつられて笑った。

「それこそ医者の不養生って奴じゃねぇか。病院も大変だなー」

天空鬼界、鬼の国の子鬼道場。そこの床に直に座って、彼らは休憩がてら談笑していた。

婆稚は続ける。

「オレ風邪なんて引くの初めてだったからさ、なんかもう逆にはしゃいじゃって。

『うわーなんか変ー』って走り回るオレをやかましいって怒鳴りつけて白澤の熱上がったりとか、あれをカオスって言うんだろなー。」

話題はやがて過去へと遡ってゆき、九尾兄弟へと行き着く。

「……それで、結局シンもセイも、その隠れ陰陽師に何もしなかったんだ。せっかく捕まえたのに……」

それを聞いて、す、と翠嵐丸の表情が冷たくなった。

「殺せばよかったんだ」

翠嵐丸のその言葉に、道場全体が水を打ったように静かになる。

せっかく捕まえたのに、復讐しないって偉いよな――そう言おうとしていた婆稚の表情が引き攣った。

「……翠嵐丸？」

小さく、諌めるように婆稚が彼の名を口にしたが、翠嵐丸は止まらない。

「そこにどんないきさつや事情があっても、悪いことをしたのは事実だ。憎くないわけがない、そんなのはうわべだけの綺麗事だ。だったら、いっそ殺して全てを終わらせてしまえばよかったんだ。」

その露草の瞳に宿るのは、婆稚が初めて彼と会ったとき垣間見たのと同じ冥（くら）い光。

「俺はそんなに、自分を偽ってまで優しくはなれない。《出来損ない》をかわいそうだとは思うけど、だからって憎まずにいられるわけじゃない。俺は絶対に復讐する」

黙ってよそを向いていた氷雨の淡い青色の瞳が翠嵐丸を見た。

「全ての《出来損ない》と、それを生み出す陰陽師に……」

翠嵐丸が言い終わる前に、茜の黄褐色の瞳が彼を睨みつけた。

「やめんか翠嵐丸ッ！！」

茜の、まだ高い少年の声が道場中に響き渡る。

そのおかげで、半ば凍りついたように翠嵐丸の言葉を聞いていた他の子鬼たちも我に返ったようだった。

茜は続ける。

「《出来損ない》に身内をやられたのはぬしだけではなかろうが！ぬしが復讐しようがしまいがわしの知ったことではないが、場所を考えて喋れ！！」

珍しく語気を荒げ、仁王立ちで怒鳴る茜の拳には、妹の葵が縋りつくように両手を添えていた。

怯えた目で兄を見つめ、へたり込んで震えている彼女を見て、翠嵐丸は気まずそうに目を逸らす。

すると、似たような光景が道場のあちらこちらで目についた。

――それだけ。

子鬼たちにとって、《出来損ない》は恐怖の対象なのだ。

「……悪かったよ。みんなも、ごめん」

悄然とした翠嵐丸の謝罪に、ぎこちないまでもやっと道場にいつもの賑やかさが戻る。

ふんと鼻を鳴らした茜は、もう一方の手で己の拳に添えられた葵の手に触れるとすっと膝を折った。

「あ、兄(あに)、ィ、兄ィ……っ」

「うむ」

小さく震える葵の頭を胸に抱え、茜は穏やかに彼女の背中を撫でる。

「大丈夫じゃ。儂はどこにも行かん」

「……氷雨、聖、は」

えぐえぐとしゃくりあげる葵に、呼ばれた2人の鬼は一瞬顔を見合わせるがすぐに答える。

「心配せんでも俺もどこっちゃ行かへんでー」

「……私もだ」

よしよしと、周囲の特に幼い子鬼たちの頭をわしわしとかいぐり回しながら聖がお気楽に言って、氷雨も小さく頷いた。

その淡い水色の瞳が翠嵐丸を見る。次いで、葵が彼の名を口にした。

「……翠嵐丸、は？」

ぴたりと、その一帯だけ空気が凍る。

その中で、貴様もし妙な返事をしてみろ儂が成敗してくれると言わんばかりの瞳で茜が翠嵐丸を睨んだ。

そのせいかどうか、少しばかりぎこちない様子で彼は答えた。

「……あ、あ。俺も、どこにも行かねぇよ」

それを聞いて、やっと葵が表情を和らげる。

「……なら、いいんでありんす。もう、誰かがいなくなるのは嫌でありんすからな」

涙をいっぱいに溜めた目で微笑む葵の頭を、常の変化に乏しい表情で茜が撫でた。

「……」

ぽりぽりと翠(みどり)の頭を掻いて、翠嵐丸は居心地悪そうに道場から出ていく。それに気づいて、婆稚もその後を追った。

†††††††††††

「翠嵐丸」

「あ――……　婆稚」

はは、と乾いた声で笑って翠嵐丸は言った。

「なんかゴメンな、いきなり。自分でもあーまずいこと言ってんなーと思うんだけど、止まんなくて」

婆稚の髪と翠嵐丸の髪が、風に遊ばれて揺れる。やがて翠嵐丸が

口を開いた。

「前に婆稚、言ってたよな。俺の友達は、俺が《出来損ない》に復讐することより俺がそばにいることを望むんじゃねぇかって」

「うん」

婆稚は頷いた。初めて翠嵐丸と会ったときのことだ。婆稚は、彼の姿を兄に重ねてそう言った。

「なんか、あんときはよく分かんなかったけど。今日、葵に言われて初めて気がついた。俺、友達より《出来損ない》優先しようとしてた」

うわあああ、と翠嵐丸はしゃがみ込んで自分の頭を掻きむしる。

「そういうのって最悪じゃね？　俺嫌な奴じゃね？　でもさあ……っ」

憎いものは、憎いのだ。

婆稚も考え考え口を開いた。

「……そりゃ、オレだって憎むなとは言わないよ。それは仕方ないことだもん。

だけど、それに任せてせっかくの人生……まあ、鬼だけど、人生？　をフイにしちゃうのは、もったいないんじゃないかな」

「もったいない……？」

翠嵐丸が不思議そうに言うと、婆稚は頭を掻きながら言った。

「うーん、なんか、復讐って絶対やんなきゃいけないわけじゃないじゃん。復讐より大事なこととか楽しいこととかも絶対あるだろ？だったら、復讐にかける時間そっちに回したほうがよくないかな？」

「あ――……」

翠嵐丸は納得したように婆稚を見上げる。

「なあ、婆稚。俺だってその理屈は分かるし、葵を泣かせてぇわけでもねぇんだよ。でも、憎しみが消えるわけでもねぇ。どうしたらいいと思う？」

「そんなの分かんないよ」

婆稚はすぐに降参の身振りをしてみせた。

「オレは翠嵐丸じゃないし、身内を《出来損ない》に殺されたことがあるわけでもない。翠嵐丸の気持ちを想像することはできるけど、理解することはできない」

うー、と翠嵐丸が再び頭を抱えた。相当悩んでいるようだ。

こういうとき白澤なら何て言うんだろうなあ、そう思いながら婆稚も言葉を探す。

「分からないなら、無理に今考えなくてもいいと思うよ？　翠嵐丸

が葵を泣かせたくないと思ってるんなら、今はそれで十分なんじゃないかな。
時間が経てば、いい考えが浮かぶことも、考えが変わることもあるかもしれないし」
「そうだな……」
翠嵐丸も頷く。
これは、２人の子鬼には難しすぎる問題だった。
†††††††††††††
「ただいまー」
婆稚が白澤病院に戻り、洞窟の入口で言ったが、誰もおかえりとは返してくれなかった。
保護養液の湖の真ん中、浮遊する岩の上で、白澤と件が緊迫した空気を醸し出している。
「……？」
ひょいっとその岩まで跳んで、彼らのすぐそばまで近づいて初めて件が婆稚の帰還に気づく。
「……ああ、お帰りなさい」
「ただいま」

もう1度言って、婆稚は無言のまま微動だにしない白澤の視線を辿る。

ざっ、と。

保護養液の水面から、右手が突き出した。

見覚えのあるその手に、婆稚は目を見開く。思わずそれを掴み、岩の上まで引き上げた。

「……げほっ、うっ……　げほげほっ」

顎の高さで揃えられたまっすぐな黒髪が、咳込む彼女の頬や額に濡れて張り付いている。

「……計、都」

はあ、と一息ついた彼女が名を呼ばれて顔を上げる。呼んだ婆稚は、未だに信じられないという顔で彼女を見つめていた。

「……、婆稚？」

1度は再び聞くことを諦めたその声が、自らの名を呼ぶ。

じわりと、視界の端が歪んで。

婆稚は計都に飛びついた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3430s/

白澤の助手さん

2011年11月6日11時12分発行